

『獲物の争奪』(La Curée) 翻訳

中井敦子

この作品は、エミール・ゾラの『ルーゴン・マカール』叢書全二十巻中の第二巻である。アリストイッド・ルーゴン(ルーゴンとマカールという二つの家系の始祖アテライード・フークの孫で、ピエール・ルーゴンの三男)は、南仏からパリに出て、サカールと姓を変え、政治家の兄ユージェーヌの後ろ楯を得て、オスマン計画によるパリ大改造に乗じて不動産投機に乗り出す。ブルジョアの旧家出身のルネとの再婚で豊富な資金を得て、彼は莫大な儲けを手にする。ルネは、アリストイッドと先妻との間の息子マクシムと愛人関係になり、倦怠と浪費の日々を送る。二人の関係はアリストイッドに露見し、マクシムは資産家の病弱な娘ルイズ・ドゥ・マルイユと打算的結婚をし、ルネは全財産をアリストイッドに搾取されたあげくに病死する。ラ・クロツシュ紙に一八七一年九月二十九日から十一月五日まで二十七回に亘って連載されたが、第四章途中で中止された。カフエ・リツシュでルネとマクシムが結ばれる場面が公序良俗に反すると、政府からの圧力がかかったのである。同年中に、単行本初版が、ラクロワ・フェルベッコヴエン社から発売された。

ゾラの作品は邦訳の出ているものが多いが、『獲物の争奪』は管見のかぎりでは、まだ訳されていない。今回訳するのは、問題の第四章である。この章は、全七章からなる作品の中央に位置し、物語展開において大きな節目をなしている。翻訳の底本としては、プレイアード版『ルーゴン・マカール』叢書(一九六〇)を使用した。

第四章

マクシムとルイズは、きんぼうげ色の小さなサロンの二人掛けソファに寄り添って、笑いざざめいていた。そのかたわら、ルネは温室で心を乱す匂いの中にいた。そのときは、焼けつくような欲望がはつきりと形をとって、彼女の胸にこみあげてきていたが、やがて消え去ったようだ。まる

で、悪夢をみても、そのあとかすかなおののきしか残らないように。タンジャンの葉の苦味は夜どおし唇に残っていた。この呪われた葉の刺激は、まるで、何か炎のように熱い唇が彼女の唇に重なって、身をさいなむ愛欲を吹き込むような感じであった。やがてこの唇が離れると、ルネの夢は、彼女にのしかかってくる得体のしれぬ大きな流れの中に呑み込まれていった。

彼女は朝方になって少しまどろんだ。目が覚めると体の調子が思わしくない。カーテンを閉めさせ、医者には胸がむかつき頭が痛いとうったえて、まる二日間、一切外に出ようとしなかった。そして、人が来るとうるさいと言いつ張って、誰が来ようと門前払いしたので、マクシムが訪ねてきても無駄であった。彼はこの邸宅には寝泊まりしていなかった。このほうが好き勝手に生活できるからだ。それにしても、これほど居の定まらぬ者はいないだろう。父親が新築した家々を好きな階を選んで泊りあるき、毎月のように場所を変えた。この引越しは、大体は気紛れのせいであったが、ちゃんとした借家人に譲るための場合もあった。誰か女を連れては、建ったばかりの家に入りこんでいたのである。義母の気紛れには慣れっこだったので、大いに同情する風を装い、心配そうな顔をして日に四度もご機嫌うかがいに来たが、これはもっぱら彼女をからかうためであった。三日目、彼がやってくると、きんぼうげ色の小さなサロンで、ルネはにこやかに、ゆつたりくつろいでいるように見えた。顔にはほんのり赤味がさしている。

「さてと、セレストとはたつぷり楽しんだの？」女中と長い間二人きりでいたことにふれて、彼は訊ねた。

「まあね、あんな娘はちよつといないわよ。手がいつも氷みたいに冷たくって、その手をおでこにあててくると、少しは頭が楽になるの。」

「ふうん、葉みたいなもんだな、あの娘は。もし僕が不幸にして恋煩いにもなつたら、貸してよね、心臓の上に両手をあててもらおうと。」

二人はふざけあい、ブローニーの森へいつもの散策に出かけた。二週間が過ぎ、ルネは以前にもましておよばれや舞踏会にのめりこんだ。今一度心境の変化があったようで、もう、かつたるとかうんざりするとか愚痴らなくなった。ひそかに何かがあつたようだ。彼女はそれについて語りはしないが、自分自身に対してますます目に見えて投げやりになり、以前にもましてあぶなつかしい変態趣味が上流婦人の気紛れの中に加わつたので、それとわかった。ある夜、彼女は、人気女優ブランシュ・ミュレルが裏社交界の女王たちや「劇場の姫君」である女優たちを呼んで催す舞踏会に何が行きたいと、マクシムに打ち明けた。彼自身はたいして気が咎めるわけではなかったものの、こう切り出されると不意をつかれて困った。ほんとうにママの行くようなところではないし、何も面白いことなかない、それに、もし正体がばれたらスキャンダルになるよ、と義母を諭そうとした。こういうもつともなことを言われても、ルネは手をあわせ、笑みを浮かべて頼み込んだ。

「ねえ、お願いよ、マクシムちゃん。行きたいんだってば……濃いブルーのドミノを着るからわかりやしないわ、お家の中を素通りするだけよ。」

マクシムは結局はいつも折れたから、義母にちよつと頼まれただけでパリ中の悪所に連れて行きかねなかつた。彼が、まあいいや、ブランシュ・ミュレルの舞踏会に連れて行ってあげるよと折れると、ルネは思わぬご褒美をもらった子供のように手を叩いてはしゃいだ。

「まあ、うれしい、明日よね？ うんと早めに迎えに来てちょうだい。ああいう女の人たちがやってくるのが見たいわ。みんなの名前を覚えてね、

すっかり楽しましようよ……」

だが彼女は考えて言い足した。

「やっぱりここには来なくていいわ。辻馬車でマルゼルブ大通りで待って。わたしは庭を通って出るから。」

こうして秘密めかしたほうが、この気晴しはより刺激的になるし、悦びも研ぎ澄まされる。彼女が正面玄関から真夜中に出て行ったところで、夫は窓から覗きもしないであろう。

翌日、セレストに帰りを待っているよう言いつけてから、甘いおのきを覚えつつ、ルネはモンソー公園の暗闇を通りぬけた。サカールはパリ市役所と親しいのを利用して公園の小扉の鍵を手に入れており、ルネも一つ欲しいと言つて自分用を持つていた。彼女は道に迷いそうになったが、二つの目のような黄色い角灯を追って辻馬車を見つけた。この頃はまだ、マルゼルブ大通りは開通して間がなく、夜になるとまったく人氣がなかった。彼女は馬車のなかにするりとすべりこんだ、恋人に逢いにでも行くように興奮し、胸を甘く高鳴らせて。マクシムは落ち着きはらつて、辻馬車の隅でうとうとしながら葉巻をふかしていた。葉巻を捨てようとする、ルネはそれをやめさせようとした。暗闇のなかでマクシムの腕を押さえるつもりが彼の顔いっぱいの手を当ててしまい、二人とも面白がった。

「わたし、煙草の匂いって大好き、彼女の声が上がった、「捨てなくていいわ……さあ、今夜は滅茶苦茶やるわよ……わたしが男役。」

大通りにはまだ照明がなく、マドレーヌ寺院の方へ向かう間、馬車の中は真つ暗で、二人は互いの姿が見えなかった。時折マクシムが葉巻を口元を持つてゆくと、濃い闇に赤い点のような穴が穿たれて、ルネはそちらを見た。マクシムは、馬車の中いっばいに広がったドミノの黒縹子になかば埋もれて、退屈そうに黙つて煙草を吸いつづけていた。実をいえば、義母と待ち合わせたばかりに、彼女たちの一団とカフェ・アングレへ一緒に行きそこねたのである。この女たちはそこでブランシュ・ミュレルの舞踏会の前祝いと打ち上げをすることにしていて。マクシムはぶすつとしていたので、暗闇の中でも、機嫌の良くないのがルネに伝わった。

「気分でも悪いの？」彼女は訊ねた。

「いや、寒いんだ」とマクシム。

「あら、そう、わたしは暑くつて。息が詰まりそう……わたしのベチコートの端でも膝にあてなさい。」

「ママのベチコートはもうたくさん、うんざり、膝どころか目のところまでとどいてるよ」、マクシムは不機嫌につぶやいた。

だが、ほんとうにルネの衣装に埋もれそうなのを見て、自分が思わず言ったことが可笑しくなり、彼はすこしずつ明るくなっていった。ルネは今方モンソー公園でどんなに怖かったかを話し、そしてほかに色々したいと思つてゐることのひとつを打ち明けた。小船が道に乗り上げて打ち捨てられているのが、いつも窓から見える。その小船に乗つて、夜中に公園の小さな池に漕ぎ出したいのだ。感傷的になつてゐるな、とマクシムは思った。

馬車は走りつづけ、闇は深く、車輪の音の響くなかで相手の言うことを聞こうと身を寄せあい、動くたびに軽く触れあい、時折うんと近づくと温かい息が感じられた。そして、マクシムの葉巻は一定のリズムで火を強め、暗闇に赤い染みをつけ、ルネの顔にほのかな薔薇色の光を投げかけた。この一瞬の灯りに浮かび上がる彼女は美しく、マクシムははっとした。

「いやあ、きれいだなあ、ママ、今夜は……ちよつとよく見てみようつと。」

彼は葉巻を近づけ、急いで何口か吸込んだ。ルネは馬車の片隅で熱い光に照らされ、息を切らしているようにみえる。頭巾はすこし捲り上がっており、ふさふさした細かな巻毛は青いリボンで結わえてあるだけで、襟の詰まった黒縞子の上衣から出ている顔は子供のようだ。葉巻の光をたよりにこんなふううつつり見つめられるなんて、何だかとても変な感じがする。彼女は小さく笑いながら身をそらし、マクシムはふざけて深刻な調子で言った。

「やれやれ！ パパのところは無事に帰すには、ママをしつかり監督しなきゃね。」

そうこうするうちに辻馬車はマドレーヌ寺院を曲がって大きな通りへと入っていった。もうグラン・ブルヴァールだ。すると、店の煌々としたシヨール・ウインドウから反射してくる光が車内いっぱい揺らめいた。ブランシュ・ミュレルはすぐそこ、バス・デュランパール街の少し高くなつた場所に建った新築の家のひとつに住んでいた。門口に止まっている車はまだ数えるほどしかない。まだ十時をまわっていないのだ。マクシムはグラン・ブルヴァールを一周してもう一時間待とうとしたが、ルネはますます好奇心をかきたてられて強気になり、もし彼と一緒に来てくれぬのならたつたひとりでも家へ上がって行くと言つてきかない。彼はルネについて中に入り、思ったより人が集まっているのを見てほっとした。ルネはすでに仮面を着けており、マクシムの腕をとって歩きつつ彼に小声であれこれ言いつけ、彼はそれにいちいち答えずおとなしく言われたとおりにしていた。彼女はあらゆる部屋を探索し、カーテン扉の端を持ち上げ、調度品を点検し、見とがめられる心配さえなければ引き出しの中まで引つ掻き回しかねなかった。この家は豪華ではあったが、あちこちに奇を衒つたところがあつて、いかにも大根女優の住処すまかにしかつた。こういう悪趣味なところにさしかかると特に、ルネは、何物も見逃さず、匂いまでも嗅ごうとしてピンク色の小鼻をひくつかせ、マクシムにゆつくり歩かせた。彼女がとりわけ夢中になつたのは、ブランシュ・ミュレルがあけっぱなしにしていた化粧室である。ブランシュは常々、招待客をアルコールにまで自由に出入させていたのである。賭け事用のテーブルをいくつも置いたために、ベッドはアルコールに押し込まれていた。だがルネはこの化粧室にはがっかりした。平凡だし、絨緞には煙草の焦げ跡が点々とつき、青い絹の壁布はポマードの染みや石鹸の飛沫だらけで、いささか不潔にさえ思えたのだ。部屋を見終り、後で知り合いに話せるようにこの家の細々とした特徴まで頭のなかに叩き込むと、ここに集う人々の観察にとりかかった。男たちは、ルネの知っている面々で、殆どが木曜日、彼女の招待日に来ているのと同じ財界人、同じ政治家、同じ若い遊び人たちである。にこやかな黒服の一人は、つい昨日、彼女のところで、デスパネ候爵夫人や金髪のアフネール夫人に話しかけながらこれと同じ笑みを浮かべていたのであり、この連中

を前にすると、自分のサロンにいるような気がしてくる。女たちを見ても錯覚はやまない。ロール・ドリニーはアフネール夫人のように黄色の装い、ブランシュ・ミュレルはデスパネ侯爵夫人のように、背中のなかほどまであらわにした白いドレスである。ついにマクシムからもういい加減にやめてくれと頼み込まれると、彼女は彼と並んで二人掛けソファに腰をおろした。二人はそこにしばらくいたが、あくびをしているマクシムに、ルネは女たちの名前を訊ね、服を脱いだところを想像し、スカートを飾っているレースの長さを目測した。ルネがこんなことに真剣に没頭しているのので、マクシムは、ロール・ドリニーの手招きに^{こた}応えて逃げ出してしまった。ロールは、連れの女のことで彼を冷やかし、夜中の一時頃、カフェ・アングレで皆と落ち合う約束をさせた。

「あなたのお父さんも来るのよ」、彼がルネのところに戻ろうとすると、彼女は声高に言った。

ルネは高笑いする女たちに囲まれていた。おまけにドウ・サフレ氏は、マクシムが席を立ったのをいいことに彼女の脇に割り込んで、下品なくどき文句を並べた。それから彼とこの女たちは大きな声でしゃべったり、太腿を叩きあつたりしはじめた。ルネはうるさくて耳が割れそうで、今度は自分があくびする番となり、立ち上がってマクシムに言った。

「もう行きましょう、馬鹿じゃないの、この人たち!」

二人が出ようとすると同時にドウ・ミュッシー氏が入ってきた。彼はマクシムと会えてうれしそうで、一緒にいる仮面の女には目もくれず、恋にやつれた様子で囁いた。

「ねえ、君、あのひとのせいで死ぬ思いさ。体の方はもう良くなってるんだろ、なのに相変わらず会ってくれないんだ。僕が涙ぐんでたつて言つていてくれないか。」

「安心しなよ、ちゃんと伝えとくからさ」、マクシムは妙な笑いを浮かべて言った。

そして階段を降りながら、

「もう、ママったら、かわいそうだと思わないの?」

彼女は肩をすくめ、何も答えない。下の歩道では、待たせてあつた辻馬車に乗り込もうとして立ち止まり、マドレーヌ側とイタリアン大通り側をためらいがちに見た。十一時半になったばかりで、イタリアン大通りはまだおおいに賑わっていた。

「じゃあ、帰りましょうか」、彼女は未練がましく言った。

「馬車でちょっとグラン・ブルヴァールを見て回りたくない?このへんの大通りを一周しよう」、マクシムは答えた。

彼女はこれに賛成した。好奇心満々でのぞんだ饗宴は期待はずれに終り、またひとつ幻想をくじかれ偏頭痛の始まった状態で帰るのはいやだった。女優の催す舞踏会は死ぬほど可笑しいものだとして長らく信じ込んできたのに。十月下旬に時折ある気候で、春が戻ってきたようだ。夜は五月のように

暖かく、かすかな寒さのふるえが通りすぎると、空気はいっそう晴れやかになった。ルネは馬車の扉に顔を寄せ黙りこくって、群衆、カフェ、レストランがいつまでも列をなして過ぎゆくのを眺めた。彼女はすっかり生真面目な顔になっていて、漠然と何かを待ち望む気持ちにひたって茫然としていた。女の夢想はこういう願い事ではいいになるのだ。街娼のドレスが掃いてゆき男たちのブーツが独特の気安そうな音を響かせるこの広い歩道、悦楽とお手軽な色窓が駆け抜けて行くこの灰色のアスファルトが、彼女の眠っていた欲望を呼び覚まし、さきほどの馬鹿々々しい舞踏会を忘れさせ、もつと趣味の良いほかの楽しみをほんやりとあてにさせた。レストラン・ブレバンの小部屋の窓が並ぶなかに、女たちの影が白いカーテンにいくつも浮き上がるのが見えた。するとマクシムは、そうとうきわどい話をひとつ語って聞かせた。ある男が、カーテン越しの影で、妻が愛人といふのを現行犯で見つけたというのだ。ルネはろくに聞いていなかったが、彼ははしゃいで彼女の手を取り、あの哀れなドウ・ミュッシー氏のことからかった。

一周して戻ってきてブレバンの前をまた通りかかったとき、彼女は突然口を開いた。

「ドウ・サフレさんったら、今夜わたしを夜食に誘ったのよ。」

「ろくなものは食べられなかったよ」と、彼は笑いながら答えた、「サフレには料理のセンスなんてからつきしないからね。またどうせオマール海老のサラダが関の山だよ。」

「ううん、鶉うさぎの冷製と牡蛎かきだつて言ってたわよ……でもわたしに馴れ馴れしい失礼な口のききかたするんで困ったわ……」

彼女は口をつぐみ、また大通りを見て、しばらく黙った後、すまなさそうな様子で付け加えた。

「困ったことに、すつごくおながすしてるの。」

「なあんだ、おながすしてるの」、マクシムは大声を出した、「簡単なことさ、一緒に夜食にゆこう……どう？」

彼はこれを何の懸念もなく言ったのだが、彼女は初め拒み、きつとセレストが家で軽い食事を用意しているから、と言い張った。そうこうするうちに、カフェ・アングレには行きたくないのです、マクシムはル・ベルティエ街の角、カフェ・リッシュの前で馬車を止めさせた。彼は早々と降りてしまい、義母がまだためらっているのです、こう言った。

「このせいでママの評判に傷がつくとも思うの？ それならそうと言ってよ。僕が御者の隣に乗り込んでパパのところまで送ってあげるよ。」

ルネはにっこりして、羽を濡らすのをこわがる鳥のような風情で辻馬車から降りた。嬉しくてたまらない。足の下に歩道が感じられる。踵かかとが熱くなってくる。そして、ここから甘いおののきが、肌はだにぴりぴりと伝わってくる。何だかすこしこわいけれど、わがままが叶えられたのだ。辻馬車が走り始めてからというものは、歩道に飛び降りたくて仕方なかったのだ。彼女は小股に人目を忍ぶかに道を渡った。誰かに見られるのを恐れると、悦びがいっそう強く感じられるようだ。ちよつとした息抜きのつもりだったのに、とんでもないことをしてしまいそうな雲行きだ。ドウ・サフレ氏

の不躰ぶしつけな誘いを断わったのは後悔していなかったけれども、もしマクシムが禁断の果実を味わわせてやろうという気を起こさなければ、おそろしく不機嫌なまま家に帰ったであろう。マクシムは、勝手知ったる他人の家で、勢いよく階段を駆け上った。彼女は少し息を切らせて後についていった。海の幸や狩猟ジジ鳥獸ヒキから立ち昇るかすかな湯気がただよっており、階段に銅の細い棒で固定された絨緞じゆうけんは埃っぽい匂いがして、彼女の興奮をい増しにした。

中二階にさしかかったとき、ひとりのギャルソンに出くわした。彼はとりすました顔で、壁に身を寄せて二人に道を譲った。マクシムは彼に言った。

「シャルル、給仕を頼むよ、白い部屋がいいな。」

シャルルはお辞儀して数段上がると小部屋の扉を開いた。ガスランプの光は落とされておき、ルネは、この薄暗がり、いかがわしくも魅惑的なところに入ってゆくのだという気がした。

広く開け放たれた窓から絶えず車の音が響いてきた。天井には下のカフェの照り返しが映り、道行く人々の影が次々とその中をゆきすぎる。だが、ギャルソンの指一本で、明りは強くなった。天井の影は消え去り、どぎつい光が小部屋を満たし、ルネの顔いっぱい照りつけた。すでに頭巾は後ろにはねのけられている。巻毛は辻馬車の中で少し乱れていたが、押さえの青いリボンリボンは動いていない。シャルルのまなざしが気詰まりで、彼女は歩き出した。彼女をもっとよく見ようと目を細め、凝らしている、明らかに「ほうら、また新顔がひとり来たぞ」と言わんばかりに。

「何をお持ちしましょうか？」彼は声を上げた。マクシムはルネの方を向いて、

「ドウ・サフレさんの夜食でしょ？ 牡蛎とか鶏とか……」

マクシムが面白そうにしているのを見て、シャルルは、それとなく彼の言い方を真似てつぶやいた。

「では水曜日の夜食にでもいたしましょうか？」

「水曜日の夜食ねえ……」マクシムは繰り返した。

それから、どんなものだったかを思い出して、

「ああ、まあどっちでもいいさ、水曜日の夜食にしてくれ。」

ギャルソンが出てゆくと、ルネはさっそく鼻眼鏡をかけてこの小部屋を好奇心満々で観察した。白と金の色調の四角い部屋で、閨房のように色っぽくも粋な内装が施されている。テーブルと椅子のほかに、低いコンソールテーブルのようなものがある、そこに皿を下げるようになっていた。それから、まるでベッドのような広いソファが暖炉と窓の間に置いてある。ルイ十六世様式の置き時計と二つの燭台が白大理石の暖炉を飾っている。だがこの部屋で面白いのは姿見である。どっしりとした美しい鏡で、幾多の女たちが、名前や日付、替え詩句、とんでもない考えや呆れた告白を、

身に着けているダイヤモンドでここに刻みつけているのである。ルネは見てはいけないうるものを見たような気がして、好奇心のままにそれ以上読みます。勇気がなかつた。ベッドのようなソファを見るとまたうろたえ、落ち着こうとして、天井や、金めっきの真鍮製で五つの火口のついたシャンデリアを眺めはじめた。しかしこれは、甘く快い戸惑いであつた。真剣な面持ちで鼻眼鏡を手に、天井蛇腹でも観察するように顔を上げていた。彼女が、いかがわしげな調度品がまわりにあるのを感じて、心の底では楽しんでた。姿見には一点の曇りもなく、品のないことを書き連ねた細々とした文字の列がかすかな波立ちとなつていただけだ。臆面もなく澄みきつたこの鏡は、幾多の付け鬘を直すのに使われたであろう。きまりが悪くなるほど広々としたソファが、そしてテーブルがある。階段の匂い、というか、つんとくる修道院のような埃臭さが絨緞からかすかに漂う。

それから、ついに視線をおろさねばならなくなると、

「水曜日の夜食つて何よ」とマクシムに訊ねた。

「別に何でもないよ。友達が賭けに負けたときのことさ。」

よそでなら、彼はためらうことなく、水曜日はいつも街でひろつた女と夜食をとつていたと答えたであろう。だが、この小部屋に入つてからというもの、彼はルネを、知らず知らずのうちに、機嫌をとらねばならない、やきもちをやかせてはならない女として扱つてしまつていた。彼女の方でもそれ以上こたわらず、窓際に行つて肘をつき、マクシムも傍らに來た。二人の背後では、シャルルが皿や銀器の音をさせながら出たり入つたりしてゐた。

まだ午前零時前だ。眼下の大通りでは、パリはうなり声をあげ、熱っぽい一日をひきずつて、なかなか床に就く気にはならないようだ。木々の連なりがぼんやりした線となつて、白っぽい歩道とほうと黒くなつてゐる車道を区切り、馬車の轟音と角灯が次々と行き過ぎる。この薄暗い帯の両側に、新聞の売店が点々と輝いてゐる。まるで、何かの巨大なイルミネーション用に、奇妙な色づけされた丈の高いヴェネツィアングラスのランプが、地面に等間隔に置かれてゐるようだ。しかし、今頃はまだ、この抑えた輝きはまわりのショーウィンドウの明るさに紛れてゐる。鏡戸が一つもおろされていないので、歩道は影一筋なく伸びてゆく。光は歩道に雨と降り注いで、金粉を撒き散らすかのよう。熱くはじける真昼の明るさだ。マクシムはルネに、向かいのカフェ・アングレを指し示した。窓がきらきらしてゐる。だが、向かい側の家並や歩道を見ようとすると、並木の高い枝がすこし二人の邪魔になる。二人は身を屈めて枝の下から覗き込んだ。往來は途絶えない。人々は数人ずつかたまつて通りすぎ、娼婦たちは二人組でスカートを引きずり、時々、まわりにけだるく微笑みかけながら、悩ましげな身振りでスカートを持ち上げた。窓のすぐ下に、カフェ・リッシュは太陽のような灯りのもと、テーブルをいくつ外に出してあり、この灯りは車道のなかほどまでとどいてゐる。明々と燃えるこの光暈の中に、ルネとマクシムは、道ゆく人々の青ざめた顔、白々とした笑いがはつきり浮かび上がるのを目にした。円テーブルのまわりでは、数人の女が男たちにまじつて酒を飲んでゐる。この女たちは派手な服を着て、髪は乱れて襟元に入り込み、椅子に凭れて体を揺すつては声高に話してゐるが、まわりが

やかましくて聞こえない。ルネはある一人の女に特に注目した。ひとりぼっちでテーブルにつき、白いギビュール・レースのついたどぎつい青色の上下揃いの服を着ている。体をそらせて、ちびちびとグラスのビールを飲み、腹に手を当てて、鈍重で諦めたような人待ち顔である。歩いている女たちはゆっくりと人ごみに紛れてゆき、ルネはこの女たちが気になって、目で追い、大通りの端から端まで見やった。通りの彼方は騒々しく雑然とし、歩む群衆が黒くうごめきひしめいており、灯りはかすかに瞬いているだけだ。そして人の列、奇妙に入り混じりながらも同じような群衆が、うんざりするほど単調に、途絶えることなく通りすぎてゆく。様々の鮮やかな色彩、点々と穴のように散らばる暗闇、無数の炎が揺らめいて幻想的に入り混ざるなかを。この無数の炎は、店から絶えず流れ出ては窓や売店の広告パネルを染め、棒や文字や炎の形をとって建物正面を走りゆき、点々と星のように闇に浮き上がり、車道に沿ってゆきすぎず。小さな自動人形の果てるともない行進を伴奏するオルガンの旋律のように、耳を聳する音が、ごうごうと長い唸りを上げて、一本調子に立ちのぼる。ルネは、一瞬、事故でも起こったのかと思った。人の波が一つ、オペラ小路の少し向こうで左に動いた。だが、鼻眼鏡をかけると、そこに乗合馬車の駅があるのがわかった。大勢の人々が歩道に立って待ち、馬車が来るやいなや殺到するのだ。車掌のだみ声が整理番号を点呼するのが聞こえ、計数器のカチカチいう音が澄んだ音色で響いてきた。ある新聞売店の、エピナル版画のような原色の看板に彼女は目を止めた。窓ガラスには、黄と緑の枠の中に、髪を逆立てた悪魔のせせら笑う顔がある。帽子店の広告なのだが、彼女にはわからない。五分毎にバティニョール行きの乗合馬車が、黄色い車体に赤い角灯をつけて通り、ル・ペルティエ街の角を曲がり、轟音を上げてカフエ・リッシュのある建物を揺さぶった。ルネは乗合馬車に乗った男たちを見た。疲れた顔を上げ、彼女とマクシムをじろじろ見ている。鍵穴を覗く^か餓えた人々のように好奇心満々の目で。

「今頃、モンソー公園は寝静まっているでしょうね。」

これは彼女が口にした唯一の言葉であった。二人はそこに二十分ほどじっとしていた。何も語らず、音と光に酔いしれて。それから食卓がととのうと、腰をおろした。ギャルソンがいるとルネが気話まりのようなので、マクシムは彼をさがらせた。

「二人にしてくれないか……デザートになったら呼ぶから。」

彼女の頬にはほんのり赤みがさし、目は輝き、まるで走ってきたようだ。窓辺から大通りの喧騒と活気をすこしもつてきていた。マクシムが窓を閉めようとする^と彼女はいやがった。彼が、やかましいからという^と、

「あら、いいじゃないの、オーケストラみたいなものよ。変わった音楽だと思わない？ 牡蛎とか鶉の伴奏にはびったりよ。」

この気晴しで彼女は三十歳よりも若返っていた。動作は機敏で、いくらか熱気を帯びている。こんな小部屋、そして通りの賑わいのなかで、若い男と差し向かいでいる、このことが彼女を刺激して、若い娘のようにしていた。彼女は決然と牡蛎にとりかかった。マクシムは空腹ではなく、彼女ががつがつ食べるのをにこにこしながら見ている。

「おやおや、ママは夜更かしの夜食族としてもしつかりやっていったのにね」と彼はつぶやいた。彼女はお腹がちょっと口を休めた、こんなにはやくかきこんでしまった自分自身に腹を立てて。

「だってお腹がすいてるんだもの、仕方ないじゃない。あの馬鹿な舞踏会のおかげでべこべこよ……あなたもあわれなひとね、あんな連中とつきあつて。」

「ママのお友だちが僕と一緒に夜食でもしてくれるんなら、シルヴィアとかロール・ドリニーとはおさらばするって約束したでしょ。」ルネは尊大な身振りをした。

「そりゃそうよ。わたしたちが相手なら、あの女たちとは別の楽しみかたがあるでしょ、そうだとおっしゃい。シルヴィアとかロール・ドリニーがあなたたちから愛想を尽かされることがあるように、わたしたちの誰かが、つきあつた男の人から嫌われてしまうこともあるわ。でもね、かわいそうに、この女はその男の人を一週間だつて引き留めやしないわ！……ちつともわたしの言うこと聞いてくれないけど、まあ、ためしてごらんなさいよ、近いうちに。」

マクシムは、ギャルソンを呼ばずにすむよう、立ち上がつて牡蛎の殻を片付け、コンソールテーブルの上にあつた鶉をもつてきた。テーブルには大レストランの贅が感じられる。ダマスク織のクロスを、快い遊興の息吹がすすめてゆき、フォークからナイフへ、皿からグラスへと動くルネの華奢な手は安逸の喜びにこまかくふるえていた。いつもなら少しでも顔が赤らむとすぐ水を飲む彼女が、白ワインを水なしで飲んだ。マクシムは、ナプキンを腕にかけ、おどけた愛想をふりまいて給仕しながら、言葉が続けた。

「一体、ドウ・サフレさんは何て言ったの、ママがそんなに怒るなんて。ブスだとか？」

「もう……あのひとつで最低。うちではあんなに上品で礼儀正しいひとがあんな言葉使いするなんて信じられない。でも、赦してあげる。ムカムカするのは女たちよ。林檎売りみたい。腰に腫物ができたつて言つてる女がいてね、もうちょっとで、スカートをまくりあげてそれをみんなに見せるところだつたわよ。」

マクシムはどつと笑い出した。ルネは気色ばんで、

「ほんとにもう、あなた方つてわからないわ。あんなに汚くて馬鹿な女たちと……なのに、あなたがシルヴィアのところへ通うのを見て、すごいことがあるんだらうなつて、わたしは想像してただから。絵に描いてあるみたいな古代のお祭り、薔薇の冠かぶつた人達が出て、金の盃さかずきを傾ける、さらにはないような楽しいことをね……ところがどうして、あなたが見せてくれたのは汚い化粧室と荷馬車の御者みたいに怒鳴り散らす女じゃないの。あれなら、わざわざ悪いことするまでもないわ。」

マクシムは言い返そうとしたが、ルネは彼を黙らせ、鶉の骨を指先でつまんですこしずつ上品に噛みながら、声を潜めて付け加えた。

「悪っていうのはね、何かこう、言葉にできないような甘美なものはずよ……わたしはまっとうな女ですからね。退屈しのぎに、してはいけないことをしてみたいなんて罪深いことを考えたとしても、きつとブランシユ・ミュレルたちよりは数段ましなことを思いつくわ。」

そして、真面目な顔で、無邪気にも反世間気取りの、奥のある言葉で締めくくった。

「教育の問題よね、わかる？」

彼女は鶉の小骨をそつと皿に置いた。過ぎゆく馬車のごうごうという音が延々と続き、それより高い音はひとつとして上がらない。マクシムに聞こえるように、彼女は声を大きくせねばならず、頬はますます赤くなった。コンソールテーブルの上には、まだトリユフ、アントルメの菓子、アスパラガス、旬の一品があった。マクシムは、その都度立たなくてもよいように、これら全部をもってきた。テーブルが手狭なので、彼は、ルネと自分との間の床に、シャンパンの瓶を冷やしている氷の入った手桶を置いた。ルネの食欲はとうとうマクシムまで征服し、二人はあらゆる料理に手をつけ、時々急にはしゃぎながら、シャンパンを飲み干した。飲んだ後では、思いのたけをぶちまけあう二人の友のように肘を付いて、あやしげな理屈を述べ立てた。通りの騒音は和らいでいたが、彼女には逆に大きくなっているように聞こえ、時折、車輪という車輪が頭のなかでぐるぐる回っているような感じがした。

デザートを頼むのにギャルソンを呼ぼうかとマクシムが言うと、彼女は立ち上がり、丈の長い縞子のブラウスをふぐつてパン屑を落として言った。「そうね……葉巻すつていいわよ。」

彼女は少し酔っていた。何やら変わった音がするが何だろうと思つて窓辺に行つた。もう店を閉めているところだ。

「ねえ、オーケストラはおしまいよ」と、マクシムの方に振り向いた。

彼女はまた身を乗り出した。真ん中、車道では、辻馬車と乗合馬車の角灯が、相変わらず、まるで色のついたまなざしを交すように、行き交つてはいるが、先程よりまばらになり、動きが早い。両側の歩道沿いには、閉まった店の前に、暗闇の大きな穴が点々と穿たれていた。カフェだけが煌々と輝いて、アスファルトに光の帯の縞模様ができている。ドゥルオ街からエルデル街まで、こうして、白い四角と黒い四角が長々と連なつて、街に最後まで居残っている人々がそこに現われては消えるのが面白い。なかでも娼婦たちは、ドレスの裾を引きずつて、ざらざら照らされては影に沈み、何か夢幻劇の中の、電気的光を横切る幻か青ざめた操り人形のような。ルネはひととき、この劇を楽しんだ。もう大きく広がつた光はなく、ガス灯も消えつゝあつた。色とりどりの新聞スタンドは、先刻よりもっとはつきりと、染みのように闇に浮かんでいる。時折、芝居が跳ねたのか、一群の人々を通りすぎた。だがすぐに隙間ができて、窓の下には男たちが二、三人ずつ、いくつかの組になつていて、女がそこに近づくと、彼らは立ったままで話している。喧騒がおさまってきているので、言葉の端々が聞こえてくる。それから大抵、女は男の誰かひとりと腕を組んでどこかへ行くのであつた。他の娼婦たちは、カフェからカフェへと渡り歩き、テーブルのまわりをうろついては置き忘れてある砂糖をとり、ギャルソンとふざ

けあい、もの問いたげに、暗黙のうちに自分を売り込んで、居残っている客たちをじつと見つめた。そして、ルネは、バティニョール行き乗合馬車、殆ど空のアンペリアル馬車を目で追った直後、青いドレスと白レースの例の女が歩道の角にすつくと立って、あたりを見回し、相変わず人待ち顔なのに気づいた。

彼女が我を忘れて見入っているの、マクシムは窓辺まで呼びに来て、カフェ・アングレの半開きになった窓の一つを見やると、にやりとした。

自分の隣で父親が夜食をとっているのだと思うと可笑しかった。しかし今夜は、特別に慎しんで、いつもの冗談は控えていた。ルネは未練たつぷりに窓辺を離れた。何かしら陶酔が、けだるさが、大通りのほんやりした奥底から立ち昇ってくる。馬車の唸りが静まり、明るい光が消えてゆくと、逸楽と眠りへのやさしい誘いが聞こえるようだ。囁き声が耳をかすめ、暗い片隅で人々が三々五々と立ち止まると、歩道は、泊り客がかりそのめの床に就く頃の、どこか大きな宿屋の廊下になったようだ。光も音も消えつつあり、街は眠りに就こうとし、甘い囁きが屋根の上をたゆたう。

振り向くと、小さなシャンデリアの放つ光に、ルネは目をしばたいた。今は顔がすこし青ざめ、唇の端がかすかにふるえている。シャルルはデザートを運ぶのに出たり入ったりして、扉をばたんばたんいわせていた、ゆっくりと落度なく冷静沈着に。

「あら、もう、おなかいっぱいよ」と、ルネが声を上げた、「このお皿は全部下げて、コーヒーをもってきてちょうだい。」

ギャルソンは、女性客の気紛れには慣れているので、デザートを下げてコーヒーを注いだ。小部屋には、彼の威厳が満ちた。

「お願い、出ていってもらって」と、ルネはマクシムに言った。何だか気分が悪い。

彼はギャルソンを下がらせたが、姿が見えなくなっただけで、姿が見えなくなっただけで、一度現われて、慎重深く目立たぬ動作で、窓のカーテンをびつたりと閉めた。やつと彼が出てゆくと、やはり苛々していたマクシムも立ち上がって扉のところへ行った。

「待って。厄介払いするには、これがいちばん。」

彼はこう言うと、差し錠をかけた。

「そうね、これでやつとくつろげよう」と、彼女も言う。

二人は仲良しの友として、打ち明け話、あれこれのおしゃべりをまた始めた。マクシムは葉巻に火を付けており、ルネはコーヒーをゆつくりひとくちずつ飲んで、シャルトルーズ酒にまで手を出していた。部屋は暑くなり、青みを帯びた煙で満ちた。彼女はとうとうテーブルに肘をつけて、半開きの両拳で頬杖をついた。こうして軽く押さわると、口は小さくなり、頬が上にあがり、細くなった目はいつそう輝きを増した。金色の巻毛は今やふさふさと眉にまでかかり、こんなふうにみだれた感じの彼女の小さな顔は、とてもかわいかった。マクシムは紫煙ごしに彼女を見ながら、変わつてゐるなと思った。男か女かわからなくなるときがある。額を大きな皺が一本横切り、唇はふてくされたように突き出され、近視特有のほんやりした表情をして、彼女は立派な若者のようだった。黒縞子のたつぷりしたブラウスの襟がとても高く詰まっているために、顎の下の白くぼつてりと

した首はわずかに細い一筋しか見えないから、なおのことだ。彼女は微笑みを浮かべて見られるがままになっており、もう頭を動かさず、視線はあてどなくただよ、言葉もゆっくりである。

ふと、彼女は急に目が醒めたように、鏡を見に行った。先程から視線はぼんやりとそのあたりをさまよっていたのだ。爪先立って暖炉に手をつき、食事の前には聾聵ひんじやくしていた、あのサイン、あのあぶない言葉の数々を読もうとした。苦勞しながらシラブルを拾い読みし、笑い、また読み続けた、勉強机でピロンの著書のページでも繰る中学生のように。

「エルネストとクララ、漏斗じょうごみたいなハートが下に描いてある……あ、こっちのほうがいいわ、『男が好き、だつてトリユフが好きなんだもん』サインは『ロール』。ねえ、マクシム、これつて、ロール・ドリニーが書いたのかしら？ ……えっと、それから、ここにあるのは誰か女の人の紋章ね、雌鶏が大きなパイプ吸ってる……まだ名前が続くわ、聖人、聖女の曆みたい、ヴィクトール、アメリー、アレクサンドル、エドゥアール、マルグリット、パキタ、ルイズ、ルネ……あら、わたしと同じ名前の人がいるのね……」

マクシムの目には、鏡のなかに女の興奮した顔が見えている。女はますます背伸びして、ドミノは後に引つ張られ、弓なりに反った体の線と腰の張りがあらわになった。彼は、肌着のようにびつたりとくっついた襦子の描く線を目で追った。今度は彼が立ち上がって葉巻を捨てた。どうもしつくりこない、落ち着かない。いつもどおりのもの、慣れたものが何か欠けている。

「あつ、あなたの名前があるわよ、マクシム、聞いて、『好きよ……』と、ルネの声。

だが、彼はソファの角、殆ど彼女の足元に座っていた。彼女の両手を素早くつかむと、鏡から振り向かせて、うわずった声でこう言った。

「お願い、読まないで。」

彼女は神経質に笑いながら逆らった。

「またどうして？ わたしには何でも打ち明けてくれるんじゃないの？」

しかし彼は、さらに声をつまらせて言い張った。

「だめ、だめ、今夜はやめて。」

彼から抑えつけられ、ルネは身を振りほどこうとして手首を何度か軽く揺すった。二人はこれまでに見おぼえない目つきで、すこし少し口に出しにくい気持ちを含んだこわばった笑みを長々と浮かべて、じつと見つめあった。彼女は両膝をついてソファの端に倒れこんだ。彼女は鏡を見ようなどという動きはもう何ひとつせず、すでに降参しているのに、二人はまだもみあっていた。そして、男が彼女の体に両腕をまわそうとすると、ぱつが悪そうにかすかに笑って言った。

「さあ、離して……痛いじゃないの。」

彼女の唇から漏れたのはこの囁きだけであった。小部屋が静まりかえるなか、ガスランプはいっそう激しく燃えて、彼女は床が揺らぐのを感じ、大通りの角を曲がつてゆくのか、パティニョール行乗合馬車が地響きのような音を立てるのが聞こえた。そして、もう、取り返しがつかなくなった。ソファに並んですわりなおすと、お互い気まずいなか、彼はほそほそと言った。

「まあ、いずれはこうなったのだ。」

彼女は何も言わない。うちひしがれた様子で、絨緞の薔薇模様を見ている。

「前に考えたことあった？ ……」彼は言葉を続けた、いっそうたどたどしく、「僕は思いもよらなかった……小部屋には用心すべきだったな……」

彼女は重々しい声でつぶやいた。まるで、ペロー・デュ・シャテル家の人間としてのブルジョアの潔癖さのすべてが、この究極の過ちのなかで目覚めたかのようなのだ。

「わたしたち、おぞましいことをしてしまつたわ。」酔いが醒め、急に老け込んだような深刻な顔をしている。

息が詰まりそうになつて、彼女は窓辺に行つてカーテンを開け、肘をついた。オーケストラはもうない。眠り込んで愛を夢見る大通りから立ち昇る、コントラバスの消えゆく顫え、ヴァイオリンのはるかな鈍い音響のなかで、過ちが犯されたのであった。下では、車道も歩道も灰色の静寂に沈みこんで伸びている。辻馬車の、あの轟く車輪が、光も群衆も運び去つてしまつたかのようなのだ。窓の下では、カフェ・リッシュは閉まつていて、鎧戸からは一筋の灯りも漏れていない。大通りの向かい側では、燠火のようにきらめく光だけが漏れ出してカフェ・アングレの正面をまだ彩っている。窓がひとつ半開きになつていて、いくぶん静かになつたとはいえ笑い声が漏れてくる。ドウルオ街の始まる曲がり角からもう一方の端まで影が帯のように伸びるのに沿つて、ルネの目の届く限り、新聞売店が対称形に並んで夜の闇に赤や緑の斑点をつけている。それしかもう見えない。これは、照らし出すというのではなく、巨大な共同寝室に点々とともる常夜灯のようだ。見上げると、澄んだ空には木々の高い枝がくつきりと浮かび上がり、家々の屋根の不規則な線は、岩の積み重なる岸に似て、青みがかった海辺のような空に溶けこんでいた。しかし彼女はこの帯状にひろがる空を見るとよけいに悲しくなり、大通りの暗闇からはいくらか慰められた。人気のない通りに漂う夜の騒音と悪徳の名残が、彼女の罪悪感をやわらげてくれる。男や女たちのあの足取りの熱気が、冷えこんでゆく歩道から立ち昇ってくるような気がする。ひとときの欲望、ひそひそ声での客引き、前払いの一夜の契りなど、まだそこに尾を引いている秘め事が、空気にまじり、重い蒸気となつて、朝の息吹に運ばれる。彼女は、暗闇の上に身を乗り出し、この顫える沈黙を、寝床の香りを吸い込んだ。これで、眼下の闇から元気づけられ、街が共犯者として恥を分かち受け容れてくれるのが確かな気がした。目が闇に慣れると、ギピュール・レースつきの青い服を着た女が、灰色の静寂のなかにたったひとり、同じ場所に立つて、何も無い暗闇を前に待ち、自分を売りに出しているのに気づいた。

ルネが振り向くとシャルルがいた。まわりを見わたし、何かを察知しようとしている。彼はソファの隅にくしゃくしゃになって落ちている青いリボンを見つけ、いつもの慇懃な態度でいそいそと彼女のところに持ってきた。この時、彼女は心底恥じた。鏡の前に立って、ぎこちない手つきで、リボン結び直そうとしたが、髻はくずれてしまっていて、小さな巻毛はこめかみの上でぺたんこになっている。結び直すのは無理だ。シャルルが来て、まるで口濯ぎか爪楊枝のようなものでもすすめるように手伝いを申し出た。

「櫛はご入り用ではございませんか。」

「いや、そんなもの。それより馬車を拾ってきてくれ」とマクシムがさえぎって、シャルルを苛立った目で睨んだ。

ルネはドミノの頭巾を被るだけにした。そして鏡から離れるとき、軽く背伸びして、マクシムに抱きすくめられたために読めなかった言葉を見つけた。天井のほうへ上がってゆく形で、きたない雑な字で、シルヴィアと名前を添えて「好きよ、マクシム」という愛の告白が書いてある。彼女はむっとして唇を引き締め、頭巾をさらに少し目深まぶかにおろした。

馬車のなかでは、たまたまなく気まづかった。モンソー公園から来たときと同じように、二人は向かいあわせに座っていた。交す言葉がひとことも見つからない。辻馬車のなかには濃い闇が立ちこめて、マクシムの葉巻はもう、赤い点、蔷薇色の燠のきらめきのひとつすら灯さなかった。彼は、またもや「目のところまで」ペチコートに埋まり、この暗闇、この静寂が、そして傍らに居るのが感じられる黙りこくった女が厭わしい。この女、大きく開いた目を凝らして夜を見ているのであろう。このままではあまりに間が抜けていそうなので、彼は女の手を探り、自分の手のなかに握るとほっとして、これでまあよかろうと思った。この手は、力なく夢見るように、されるがままになっている。

辻馬車はマドレーヌ広場を横切っていた。ルネは、悪いのは自分ではないと考えていた。道ならぬ関係など望みはしなかった。自分の心の奥底を探れば探るほど、自分には罪がないという気がしてくる。気晴しに出掛けたはじめての数時間、モンソー公園を人目を忍んで抜け出したとき、ブランシュ・ミュレル宅で、大通りで、さらにはレストランの小部屋でさえも。では一体なぜ、あのソファの縁に膝をついて倒れたのかしら？ もう、わからない。一刻だってあんなこと思ってもみなかったのは確かよ。怒って、いやだって言ったわ。おふざけなのよ、面白かった、ただそれだけ。辻馬車の轟きを聞いていると、大通りの、あの耳を聳するオーケストラ、男や女のあの往来がよみがえってきた。そしてあのとときの火のような光の横縞が、彼女の疲れた目に焼けつくような痛みをおぼえさせた。

マクシムもまた片隅で、いくらか物憂い気持ちでほんやり考えていた。思いがけぬ情事に腹が立ち、黒繻子のドミノが悪いんだと思った。あんな変な格好した女っているかい！ 首も見えやしない。男と間違えたのさ、そしてふざけあつたんだ、だから、遊んでるうちに深刻なことになったからって僕のせいじゃない。肩でもちよっと見えたら、ぜったい指一本触れてなかったのに。親父おやじの女房だつてこと思い出したらうし。それから、不愉快なことをあれこれ考えるのはいやだったので、彼は、まあいいやと自分を赦した。仕方ないさ、結局。もうこれっきり、二度とやらないよう

にしよう。どじな真似したもんだ。

馬車が止まり、マクシムが先に降りてルネに手をかした。だが、公園の小扉のところ、彼はルネに口づけしかねて、二人はいつものように軽く握手した。柵の向こう側に行つてから、彼女は何か言いたげで、レストランにいたときから漠然と反芻していた気掛かりがあるのが、みてとれた。

「ギャルソンの言つてた櫛つて何なの？」

「櫛……」マクシムは答へに困つておうむ返しに言つた、「さあ、何かな……」

ルネは突然悟つた。おそらく、あの小部屋には、カーテンとか門かどとかソファと同じように、備品の一つとして櫛が用意してあるのだ。マクシムが説明してくれないので、それを待たずに、モンソー公園の闇のなかに分け入り、足どりを速めた。背後に、ロール・ドリニーやシルヴィアの金髪や黒髪が絡んだべつこの櫛の歯が見えるような気がした。彼女は高熱を出していた。セレストは彼女を寝かせて朝まで付き添わねばならなかった。マクシムは、マルゼルブ大通りの歩道で、カフェ・アングレの賑やかな仲間たちに加わつたものかどうかしばし思案したが、自分に罰を加える意味で、もう寝に帰ろうと決めた。

翌日、ルネは夢ひとつない重い眠りから遅く目覚めた。暖炉に火を焚かせ、一日中寝室にすることにした。悩みごとのあるとき、彼女はここに逃げ込むのであった。正午近く、妻が食事に下りて来ないので、サカールは少し話がしたので会いに行つてもよいかと訊ねてきた。彼女はふと不安になつて断わりかけたが、思い直した。前日、十三万六千フランと、いささか高額のウォルムズの請求書を夫に渡してあつたのだ。だから、彼は領収書を妻に自ら手渡しして、いい格好がしたいのかもしれない。

昨夜のみだれ髪のことか思い出された。セレストがざつくりと編んでくれた髪を鏡で何の気なしに見ると、暖炉のそばでまるくなりレースの部屋着にくるまつた。サカールの私室も二階にあつて、ルネの部屋と対をなしていた。彼は夫としての気安さで、室内履きのままでやつてきた。妻の寝室に足を運ぶのはひと月に一度あるかないかで、いつもこみいった金銭問題のためであつた。その朝、彼は眠れなかつたらしく、目は赤く、顔は青ざめていた。彼は優しく気取つてルネの手に口づけた。暖炉のもう片方の端かくくに腰をおろすと、

「具合が悪いの？ ちょっと頭でも痛いでしょ？ ……僕みたいな商売人がわけのわからない話を聞かせてよけいに頭が痛くなると申し訳ないんだけどね、深刻な事態なんだ……」

彼は部屋着のポケットからウォルムズの請求書を取り出した。光沢紙で、ルネにはそれとわかつた。

「きのう、机の上にこれがあつたよ。すまないけどね、今のところ、とてもじゃないけどこれは払えないな。」

この言葉に彼女がどういふ反応を示したか、彼は横目で観察した。彼女は心底びっくりしたようだ。彼は笑みを浮かべて言葉を継いだ。

「わかつてると思うけど、僕はふつう、君の使つたお金の中味をいちいち調べ上げはしないよ。ただ、この請求書にはいくつかの点でちよつと驚

いたね。たとえば、だ。二ページ目にあるだろ、舞踏会用ドレスが。『生地が七十フラン、仕立て代が六百フラン、未払い金が五千フラン、ピエール博士の化粧水が六フラン。』七十フランの服がずいぶん高くなるんだなあ……でもね、君がこの種の品物に弱いっていうのはよくわかってるんだ。請求額は十三万六千フラン、君としては控えたほうだろ、これでも……ただ、しつこいようだけど、僕には払えない。金に困ってるんだ。」

悔しいのをぐっとこらえた様子で、彼女は手を突き出し、無愛想に言った。

「そう、わかったわ。請求書を返して。自分で何とかするから。」

「僕の言ったことを信じてないようだね」、金に困っていると書いても妻が信用しないのがまんざらでもなさそうにつぶやいた、「にっちもさっちもいなくなってるとは言わないが、この頃色々難しいことがあってね……うっとうしいかもしれないけど、我々の現状について説明させてもらおうよ。持参金を預かってるんだから、君には何でも隠さずに言っておかないとね。」

彼は請求書を暖炉の上に置くと、火鉢をとって、火を掻き立てはじめた。事業関係の話をしながらやたらと灰を掻き回すのは、彼にとつてはひとつの計略なのだが、癖になってしまっていた。言いにくい数字とか言葉があると、積み重なった薪を突き崩しては、苦勞して薪を寄せ集め、小さな木のかけらを積み上げて、また作り直すのだ。行方のわからなくなった燠を見つげようとして暖炉のなかに殆ど入り込んでしまうこともあった。彼の声は聞こえにくくなり、相手は苛々して、燃えさかる炭を彼が器用に積み上げているのに気をとられ、彼の言うことはもう聞いておらず、大抵はまんまと術中にはまりながらも満足して帰ってゆくのであった。他人の家においてさえ、彼は厚かましくも我が物顔に火鉢をとった。夏は、ペン、ペーパーナイフ、小刀をもてあそんだ。

大きく火鉢が動き、火はゆらゆらと乱れた。

「あのね、もう一度細かい話をさせてもらうよ……僕は、君から預かった資金の利息はきっちり支払ってきた。君のお小遣いとみなしたのはこの利息だけ、と言ったって怒りはしないだろう。君が散財した分を支払ってきたし、それでいて生活費を半分負担してくれなんて頼んだことは一度もないんだからね。」

ルネはつらかった。彼はいったん黙りこんで、灰の真ん中に大きな穴をあけて薪のかけらを埋めている。そしていよいよこみいった話にとりかかった。

「僕は君のお金に相当な利子をつけてあげなきゃならなかった。わかってくれるね。元金は信頼できる人の手に委ねてある、安心していいよ……ソローニユの地所からあがる分のいくらかについては、僕たちが今住んでいる家の支払いに充てた。残りはちゃんとした会社に預けてあるんだ、モロッコの港湾銀行だけだね……まだ二人でけちけち金勘定して出し惜しむところまではいってないだろ。だけど、夫っていうのは哀れなもので、なかなか真価を認めてもらえないもんだ。これはおわかりいただきたいね。」

ある強力な動機のために、彼はいつもほど嘘をつかなかつた。実のところルネの持参金はもうとうに存在しておらず、サカールの金銭出納においては架空の数字でしかなくなつていた。彼はそこから二、三パーセントの利息を払っていたが、どんなちっぽけな証券も提示できなかったし、現金はびた一文、残つていなかった。それに、彼がなかば白状したように、ソローニュの地所のうち五十万フランは、邸宅と調度品の第一回目の前払いに使われていた。これには両方で二百万フラン近くかかり、室内装飾業者と建設業者にまだ百万の借りがあつた。

「何もお願いしないわ。あなたには随分借りがあつてますから、とうとうルネはこう言つた。」

「何ていやなことを考えるの……」と、彼は、火鉢を持つたまま妻の手をとつて大きな声を上げた、「いいかい、ひとことでは、僕は株で損したんだよ。トゥタンシラロシユがへまをやらかして、ミニヨンとシヤリエが無神経にも僕をそこに引きずり込んだのださ。君の請求書を払つてあげられないのはそれでなんだ。ゆるしてくるよね？」

彼は本当に動揺しているようだった。火鉢を薪のなかに突つ込むと火花が弾け散つた。そういえば、しばらく前から気がかりのあるようなそぶりだつた、とルネは思い出した。しかし驚くべき真実を彼女は知るよしもなかつた。サカールは、彼一流の離れ業をする羽目になつていたので。二百万の邸宅に住み、王侯貴族なみの暮しをしながら、朝起きると金庫にたつた千フランの現金すらないこともままあつた。彼の浪費はとどまるところを知らぬかみえた。借金に支えられて生活し、債権者の群に囲まれ、あれやこれやでせしめた後ろ暗い利益は、日々この群に呑み込まれてしまつた。この頃、時を同じくして、彼の傘下にあつた会社がいくつか潰れ、新たな欠損がさらに深い穴を穿つていたが、彼はそれを埋めることのかなわぬまま、はまらないように飛び越えていた。こうして彼はあちこち穿たれた地面の上で絶え間ない危険にさらされた生活をしており、五万フランの伝票を決済しながら御者の給金も払えず、ますます偉そうな超然とした顔でパリの街を歩きまわつては、からっぽの金庫からいつそうやみくもに散財した。この金庫からは、出どころの怪しい金が流れ止まなかつた。

当時、土地投機の景気は悪かつた。サカールは、さすがパリ市役所に育てられただけのことではあつて、パリ市と同じく、すぐに改造したが、享樂にうつつをぬかし、狂つたような浪費に走つてきていた。そして今や、やはりパリ市と同じく、とんでもない赤字と向き合つており、それをこつそりと埋めねばならなかつた。思慮分別とか節約とか落ち着いた小市民的生活などという言葉は耳にするのもいやであつた。新しい道路の建設に頼つて、むやみに贅沢でありながらほんとうのところは逼迫している生活をしているほうがよかつた。彼はこれらの道路から巨額の富を引き出しても、朝儲けたと思つたら夕べには浪費してしまつていたので。危ない橋を渡りながら、彼にはもう資本はなく、金びかの看板だけが輝いていた。狂燥の時にあつて、パリ自体も、同じようにうつつをぬかして自分の未来を抵当に入れており、財政上のありとあらゆる愚行とごまかしに猛進していた。公共支出経費はすさまじいものになりそうであつた。

最高にうまみのある投機も、サカールの手にかかると駄目になつた。彼は、自分でも言つていたとおり、株で大損をしていた。トゥタンシラロシ

ユ氏は値上がりを見越して思惑買いたたために、急な値下がりでも葡萄栽培信用金庫を潰しかけた。幸い政府がひそかに介入して、栽培業者への抵当貸しで名のおつたこの金融機関を立て直したのだった。パリ市の債券が、葡萄栽培信用金庫が陥った破綻危機のおおりにうけて信用を失いかけたことで、大臣の兄からさんざん罵られ、おまけに不動産投機でも景気は悪く、サカールは泣き面に蜂であった。ミニオンとシャリエは彼とは完全に手を切っていた。彼がこの二人を咎めだてしたのは、騙されたという怨念からであった。彼は自分の取り分の土地にあれこれ建物を造らせていたのに、彼らは自分たちの土地を抜け目なく売り払っていたのだ。二人がちやっかり儲けている一方で、サカールには厄介な建物が残るだけで、損を承知でそれを処分せねばならぬことがあった。たとえば、まだ三十八万フラン未払いのあるマリニャン街の邸宅を、三十万で売った。彼はちよつとやそつとではない軽業をやりおおせてきた。せいぜい八千フランの値打ちのアパルトマンに一万フランを要求し、怖じ気づいた借家人は、家主が最初の二年間家賃をただにしてくれるという条件でしか賃貸契約に署名しなかった。こうしてアパートはもともとの値段に戻ったわけだが、家賃は数字としては年間一万であつて、サカールが買い手を見つけて建物の収益からその資本価値を見積もるときには、まさに数字の魔術であつた。だが彼はこのようなごまかしを大々的に行えなくなった。彼の建物には借り手がつかなくなったのだ。家を建てるのをあせつために、まわりに山積みになった残土が、冬には泥沼になって建物を孤立させ著しい損害を与えていた。彼にもつとも衝撃を与えたのはミニオンとシャリエの荒っぽいやり口であつた。この二人は、サカールが建設をやむなく途中で諦めたマルゼルブ大通りの邸宅を買い取っていた。彼ら土建屋は、とうとう「自分たちの通り」に住みたくなつたのだ。彼らは、自分たちの取り分を地価の上がつているうちにさつさと売り払い、かつての共同経営者であるサカールの窮状を嗅ぎつけて、サカールに地所を買い取ることを申し出た。この地所の真ん中では、邸宅を建設中で、二階の床部分まで出来上がっており、二階の鉄の骨組みも一部分作られていた。だが二人は、頑丈な切り石の土台を瓦礫の山同然に扱い、更地さらちのほうが自分たちの好きなように建てられてよいのと言つた。サカールは、建設費として十万フランあまりもすでに使つていたにもかかわらず、売らざるを得なかつた。そして彼がいっそう怒り狂つたのは、この土建屋たちが、土地を山分けしたときに定めた一平米あたり二百五十フランではどうしても引き取ろうとしなかつたという点である。まるで古着屋が前日に五フランで売つた品物を四フランでしか引き取らないように、彼らは一平米あたり二十五フラン負けさせた。二日後、サカールは石工たちが大挙してこの土地に板を敷き詰めて「瓦礫の山」の上に建設を続けるのを断腸の思いで見た。

「こういうわけで、事業が以前にもまして行き詰まっていたがゆえに、妻の前で演じた芝居にはいっそう真実があつた。彼は、ただ単に真実を語るんがために本音をもらすような男ではなかつた。ルネは疑わしげにたずねた。

「でも、あなた、そんなに困つてらつしやるんなら、どうしてわたしにあの髪飾りと首飾りを買つて下さつたの？ 六万五千はしたでしょう？ ……あの宝石を何とかすればすむことよ。あれを処分してウォルムズの内金にあてるお許しがいただきたいわ。」

すると彼は、動揺して大きな声を上げた。

「いや、ちゃんと持っていてくれ。明日、政府のやる舞踏会で、もし君があれを身につけてなかつたら、僕が何を言われることか……」
今朝は、彼はお人好し風で、ついには笑みを含んだ目配せをしながらつぶやいた。

「僕たち相場師はきれいなご婦人方と同じでね、独特の手練手管があるのさ……お願いだから、君の首飾りと髪飾りを僕のためだと思って持っていてくれ。」

彼は、あつぱれではあるがいささかきわどい話を、妻に語ることは出来かねた。ある日、夜食の終る頃、彼とロール・ドリニーは助け合いの協定を結んだのである。ロールは借金まみれで、誰かお人好しの若造が彼女をさらってロンドンにでも連れていってこないかと考えるしかなくなっていた。サカールの方でも、足元の地面が崩れてゆくのを感じていた。絶体絶命で考えたのは、自分が金貨と紙幣の上に胡座あぐらをかいているように余所よそ目に見えるようにはどうするか、であった。娼婦と相場師は、デザートの時ほろ酔い気分て手を結んだ。彼はダイヤモンドの売り立てという件くだんの話を思いつき、これにバリ中が大騒ぎした。そしてそんな中で彼は妻のために例の装身具を買って皆をあつといわせた。それから、この売り立てで得た約四十万フランで、ロールの債権者たちをどうにか納得させた。彼女はこの倍くらい借りていたのだが。彼の払った六万五千フランも、一部はここから出ていると考えられなくなかった。こうしてロールの経済状態を整理すると、彼はこの女の愛人として通るようになり、借金全額を清算したとか彼女のために大散財しているとかいう噂がまことしやかに流れた。彼には方々からお呼びがかかり、信用は最高の状態に戻ってきた。この色事は証券取引所で、にやにや笑いとあてこすりで冷やかされ、彼はご満悦であった。片やロール・ドリニーは、騒ぎのために注目的となった。サカールは一夜として彼女のところに泊ったことなどないのに、この大金持ちから女を奪い取りたいばかりに寄ってきた十人ばかりの馬鹿な男たち相手に、彼女はサカールを欺いて浮気するふりをした。ひと月のうちに、彼女は家具調度二揃いと、売り払った分よりさらに多くのダイヤモンドを手に入れた。サカールは、午後、証券取引所の帰りに彼女の家に立ち寄って煙草を一服する習慣になっていたが、慌てふためいて扉から扉へすりぬけるフロックコートの端を見かけることがよくあった。サカールとロールは、二人きりになると、顔を見合わせては吹き出した。いたずら娘のわるさを面白がるように、彼は彼女の額に口づけた。彼は彼女には一文たりとも与えておらず、逆に、賭けで借金を作って彼女に都合してもらったことまでであったのだ。

ルネは譲ろうとせず、例の装身具をせめて抵当に入れたと言った。だが、夫は、そんなことをしてはいけない、パリ中が明日それを身につけた彼女を見るのを心待ちにしているのだと言い聞かせた。彼女は、それでもウォルムズの請求書が気になって仕方ないので、また別の方策を探し、突然言い出した。

「ところで、シャロンヌの方はうまくいってるんでしょ？ この前も、儲けはすごい額になるっておっしゃってましたよね。もしかしてラルソ
ーなら、十三万六千フラン前貸ししてくれないかしら？」

サカールは先程から火鉢を足の間にうっちゃっていたが、急に荒々しくそれを握り直すと、身を屈めて暖炉の中に殆ど入り込み、ルネには彼がほそほそ言うのがくぐもって聞こえてきた。

「そうだね、うん、ラルソノーなら、ひよつとすると……」

この話を始めたときから彼がゆっくりすこしずつ導いてきたところに、彼女はやっと自分から行き着いたのだ。シャロンヌの件では、もう二年というもの、彼は見事なやり口を周到に練り上げてきていた。エリザベート叔母からもらった土地の権利を妻は絶対に手放そうとはしなかった。もし子供が生まれた場合、その子に相続させるべくしつかり持っている叔母に誓っていたのだ。こうして強情に出られたがゆえに、相場師の想像力はかきたてられて一大詩篇を作り上げた。これは究極の悪辣さの結晶であり、パリ市、国、妻、そしてラルソノーまでが餌食となる巨大なベテンであった。彼はもう土地売却のことは口にしなかった。とはいえ、愚かにも土地をみすみす遊ばせておき、わずかにパーセントの利益に甘んずるのは日々の癩の種だった。ルネはいつも金に困っており、何らかの投機をしてみろという考えをとうとう受け入れた。サカールの取引は、近々ここが土地収用の対象となるという見込みに基づいていた。これはフランス・ユージェーヌ大通り貫通のためであったが、その道筋はまだはつきりとは決定していなかった。そしてこの時、彼はかつての仲間であるラルソノーをひきいれて協力者とし、ルネとの間に次のような条件の契約を結ばせた。ルネは五十万フランの評価額の土地を提供し、ラルソノーの方ではこの土地に同じだけの価値の建物をつくる。これは大きな庭つきのカフェ・コンセルで、その庭には、ぶらんこ、九柱戯、玉突きなどあらゆる種類の遊戯施設を備えるというのである。利益は当然のこととして折半され、損失もまた同様であった。ルネは、せいぜい三十万フランの土地についた五十万という莫大な数字に驚いたようであったが、サカールはこうしておけば後々ラルソノーをうまく操縦できるのだと言って納得させた。こんな巨額の建設など出来ようはずがないのだから。

ラルソノーは洒落た遊び人になっていて、良い手袋をはめ、ピカピカのシャツに派手なネクタイを締めていた。ぶらりと出かける時には時計職人の細工物のように精巧で繊細な、座席の高いテイルビュリー馬車に乗り、自分で手綱をとった。リヴォリ街の彼の事務所には豪華な部屋がいくつも並び、書類入れも一片の書類も見当たらなかった。雇い人たちの仕事机は、嵌め木細工を施した黒い梨材で、彫りの入った銅の飾り金具つきであった。ラルソノーは土地収用代理業者という肩書きを持っていたが、これはパリの大工事が生み出した新しい職業であった。彼には、パリ市役所とのコネで、貫通予定道路が前もってわかるのだった。どの道路が着工されるか、道路管理官を通して情報をつかむと、彼はいざれ立ち退きを迫られる地主に、お役に立ちたいと申し出た。公益のための収用が決定する前に立ち回り、あれこれ小細工して補償金の額を引き上げた。地主が申し出を受け入れると、彼は一切の費用は自分持ちで土地の図面を引き、見積り書を作り、裁判手続きをし、弁護士に費用を払い、それと引き替えに、パリ市の提案する補償金額と裁判で決定された額との差の何パーセントかを受け取った。これはまだしもまともな仕事であったが、彼は他にも色々やっており、まず何よりも高利貸しであった。だが、ぼろを着て身汚く鑢銭びたのようなうつろで表情のない目、顔色悪く財布の紐のようにきりりと結んだ

唇をした昔ながらの高利貸しではなかった。愛想が良く、人を惹き付ける目つきをし、デュザトワ製の服でめかしこみ、獲物と一緒にプレバンあたり的高级レストランで食事し、親しげに呼びかけ、デザートの中にはハバナ葉巻をおごった。心の底、体にびったりしたベストの奥では、ラルソノーは情け容赦のない男で、手形一枚の支払いのために、債務者を自殺にまでも追い込みかねなかった、しかもあくまでもにこやかに。

サカールは誰かほかの協力者が欲しいのは山々であったが、ラルソノーがしっかりと握りこんでいるあの偽帳簿が気懸かりであった。この男を事業にかかわらせ、それを利用して何かの機会を見つけ、このあぶない書類を取り返すほうが得策だと思った。ラルソノーはカフェ・コンセルを建てた。板と漆喰で出来た建物で、屋根にはブリキの小さな塔がいくつか乗っていて、黄や赤に塗られたられている。庭の遊戯施設は、人の多いシャロヌヌの街では繁盛した。二年の後、この投機はうまくいったかに見えたが、儲けはほんとうのところごくわずかであった。今までのところサカールは、妻に対し、この見事な構想の将来を熱っぽく語るのみであった。

夫は暖炉からいつこうに出て来そうになく、声がますますくぐもってくる。この様子を見ながらルネは言った。

「今日、これからラルソノーに会いに行きます。わたしにはそうするしかないわ。」

するとサカールはそれまで手こずっていた薪を放し、にっこりして答えた。

「ラルソノーにはもう話してあるんだ。僕はね、君のお望みは何でもかなえてあげようと気をつかっているんだよ……あの男にはきのうの晩に会った。」

「それで、十三万六千フランは払うって約束してくれたの？」彼女は心配そうに訊ねた。

彼は燃えさかる二本の薪の間に燠を小さく積み上げ、火鉢の先で炭の小さなかけらをていねいに集め、丹精こめて築いたこの山が高くなってゆくの満足そうに眺めていた。

「そりゃ、あんまりというものだよ！ 十三万六千フランってのはたいした金額だ……ラルソノーは良い奴だけど、まだ懐具合はたいしたことないからね。条件つけるつもりだろう……」

彼は言いよどんで、目をぱちぱちさせ、今崩れたばかりの山の一角をつくりなおしていた。これを見てるとルネは頭が混乱してきた。彼女は、夫の手作業を思わず知らず目で追っていた。夫の手つきがますますぎこちなくなるので、口を出したくなかった。ウォルムズも、請求書も、手元不如意も忘れて、とうとう言った。

「その大きな塊を下に置けば、ほかのがしつかりするわよ。」

夫は素直に言われたとおりにし、話しつづけた。

「奴には五万フランしかないんだ。それにしたって前金としては悪くないさ……ただ、この問題と、シャロヌヌの件とは別にしたいんだそうだ。」

ラルソノーは間に入ってるだけなんだからね、わかってくれるだろう？ 彼に金を融通してくれる人物がとんでもない高利を要求してる。半年で八万フランの約束手形が欲しいそうだ。」

そして尖った燵のかけらを小山のてっぺんに置くと、手を火鉢の上に組み合わせてじっと妻を見つめた。

「八万フランですって？ そんなの詐欺じゃないの！ そんな馬鹿なことをしろっておっしゃるの？」 彼女は叫んだ。

「違うよ、彼ははつきりと言った、「しかし君がどうしても金が要るんなら、するなどは言わない。」

彼は出てゆこうとするかのように立ち上がった。ルネは狂おしく逡巡して、夫を見、そして暖炉の上に彼が置いた請求書を見た。ついには混乱し、両手で頭を抱えて、つぶやいた。

「ああ、もう、どうしよう！ 今朝は頭が割れそう……いいわ、八万フランの手形にサインします。もししなかつたらほんとに病気になるわ。」

わたしは自分がよくわかってるの、一日中悩み苦しむわ……どうせ馬鹿なことするんならさっさとしてしましましょう。肩の荷が軽くなるわ。」

彼女は公文書用紙を持って来させるのに召使を呼ぼうとした。だがサカールは自分で取ってくると言った。二分とたたぬうちに戻ってきたところを見ると、彼はおそらくポケットの中に紙を持っていたのだ。暖炉のそばに寄せた小テーブルの上でルネが書類に書きこんでいる間、それを眺める彼の目は、思わぬ上首尾から湧き起こってきたあるひとつの欲望にきらめいていた。室内は暑く、朝起きて湯をつかった女の匂いでいっぱいだ。話しているうちに、ルネがくるまっていた部屋着がずり落ち、前に立っている夫の視線は、うつむいている髪の毛の黄金色の間をぬって、首筋から胸もとの白い深みにまですべりこんだ。彼の笑みはいつもとは違っていた。炎に顔が熱くなり、じつとりした空気に性愛の香りがこもる閉ざされた寝室にいて、この金髪と白い肌は夫婦ゆえのなげやりなしどけない様子で、彼の気をそそる。彼は夢見心地になり、自分が今一幕演じ終えたばかりのドラマがたいしたものと思え、相場師の野卑な肉のうちには、何か秘められた淫蕩な計算が生まれつつあった。

妻が手形を差し出して、この問題を片付けてくれるよう頼むと、彼は手形を手に取りながら、まだ彼女から目を離さず、

「あんまりきれいでうっとりするよ……」とつぶやいた。

彼女がテーブルを押し戻そうとかがんだとき、彼は首筋に荒々しく唇を押しつけた。彼女は小さく叫んだ。身を起こし、ぴりぴりしながらも笑顔をつくったが、前日のもうひとりの男の口づけを思い起こさずにはいなかった。彼のほうでは品のない接吻したのはまずかったと思い、親しみをこめて妻の手を握り、今夜にも五万フランが入ると約束して部屋を出た。

ルネは一日中暖炉の火の前でうとうとした。精神的に動揺すると、植民地育ちの白人女のようにだらだらと何もせずにいるのだった。そういうときは、いつものまめさとはうってかわって、無精で、寒がり、寝ぼけていた。ぞくぞくするので、火をどんどん焚いて息詰まるように暑くなり、額に汗のしずくが光り、やがてまどろんでしまった。この焼けつくような空気につつまれて炎を浴びると、彼女はもう殆ど苦しみを感しなくなった。

苦しみはちよつとした幻のようなもの、軽い圧迫感でしなくなり、その捉えどころのなさまでが、ついには官能をくすぐるようになった。夜になるまで、暖炉が赤々と照らすなかにいた。火は、まわりの家具をさしませるほどに燃え盛り、時折彼女は、今ここにいるという感覚がなくなった。そんな火と向かいあつて、きのうのことを悔いる気持ちを鎮めた。もうマクシムのことも思い出せる。彼のことを思うと、燃えあがるような悦びを感じ、その発散する熱で焼かれそうだ。まわりに薪を積み上げた白熱した褥とこでの奇妙な性行為の夢を見た。セレストは冷静沈着な召使らしく落ち着いて部屋のなかを行ったり来たりしていた。誰も中に入れぬようにと言いつけられていたので、いつも一緒のアドゥリーヌ・デスパネやシュザンヌ・アフネールまで追いついた。この二人は、サンジェルマンと一緒に借りた離れで昼食を共にし、その帰りに立ち寄ったのだ。それでも夕暮れ時、ご主人様の妹であるシドニー夫人がお見えになりお話ししたいことがあるとセレストが取り次ぐと、通すようにと言われた。

シドニー夫人は大抵、日が暮れてからでないと来なかった。アリストテッドから言われて、何とか絹の服を着るようになってはいたが、どうしてか、買ったての絹でも、彼女が着ると、まず新品には見えなかった。しわくちゃで、艶がなくなり、ほろ切れのようだ。彼女はやはり兄の言いつけどおりに、彼の家に来るときは例の籠をもつのはやめていたが、今度は服のポケットがいっぱい詰め込んだ紙切れでふくらんでいた。ルネは、生活上の様々な必要からおとなしく言うことを聞く扱いやすい客にはならなかったが、だからこそシドニー夫人はルネに執心していた。患者をおびえさせぬよう本当の病名を告げない口の堅い医者のように、彼女はにこやかに、まめに義姉を訪ね、あれこれのちよつとした悩みを聞いてやった。まるでルネさえその気になれば自分がすぐに治してやれる痛みのように。ルネの方では、同情されたい気分ときで、頭が痛くてたまらないと思痴りたいためだけに彼女を通したのであった。

「あらあら、ここは息が詰まりそうね……」彼女は暗い部屋にすべりこむように入りながら言った、「またいつもの頭痛でしょ。それは心の病よ。いろんなことを気にしすぎるの。」

「そうなの、心配事ばかり」、ルネは物憂げに答えた。

日が暮れようとしていた。セレストにはランプをひとつも灯さぬように言っていた。暖炉の燠火だけが赤い光を大きく投げかけて、横たわったルネを真正面から照らしたし、白い部屋着のレースは薔薇色に染まっていた。影の縁には、シドニー夫人の黒い服の端と灰色の木綿の手袋をはめて組んだ手しか見えず、猫撫ねで声が暗闇から聞こえてきた。

「またお金の悩みね」と、まるで「心の悩み」とでも言うように、甘ったるく哀れみいっぱい調子で彼女は言った。

ルネは伏し目になって、それが凶星だと白状するしぐさをした。

「ああ、兄さんたちがわたしの言うことを聞いてくれたら、みんながお金持ちになれるのに。ところがあの人たちったら馬鹿にして肩をすくめるのよ、わたしが例の三十億フランの貸し金のことを言うからね……でも希望はあるのよ。イギリスに行きたいと十年前から思ってるんだけど、忙しく

って……結局、ロンドンに手紙を書くことにして、今は返事を待ってるの。」

で、ルネが薄笑いを浮かべているので付け加えた。

「あなたも信じてないのね。だけど、もし近いうちに百万ばかりわたしから貰えたら、あなた嬉しいでしょ？ ……話は簡単なの。イギリス国王の息子にお金を貸したパリの銀行家がいってね、この銀行家は相続人もなしで死んじゃったから、今は国が返済を要求できるの、複利の利息つきでね。わたし、計算してみたんだけど、二十九億四千三百万になるのよ……心配しないで、手に入るから、手に入るんだから。」

「とりあえず」と、ルネは皮肉を効かせて言った、「わたしに十万ばかり貸してくれるよう取り計らってくださいませんか……悩みの種の仕立て屋に支払うの。」

「十万はあるわ。その代償を何にするか決めればいいだけよ」と、シドニー夫人はしらっとして言った。

燠火が燃え盛っていた。ルネはますますぐったりして、足を投げ出し、部屋着の裾から室内履きの先がのぞいた。このブローカー女はおためごかしの調子で続けた。

「あなたつたら、ほんとに聞きわけがないんだから……女はたくさん見てきたけど、あなたほど自分を大事にしないひとは初めてよ。あの、ミシユランの奥さんを見てごらんさい、うまくやってるじゃないの！ あのひとが楽しそうに元気にしてるのを見ると、思わずあなたのことを考えてしまうの……ドウ・サフレさんがあのひとにお熱で、もう一万近く貢いでるのよ、知ってる？ 別荘でも持つのが夢なんですよ。」

彼女は興奮してきて、ポケットの中を探った。

「まだここに、ある哀れな女の手紙があるのよ……灯りがあつたら読んで聞かせてあげるんだけど……夫からはほつたらかされてたのよね。いくつも手形にサインしていたから、わたしの知り合いの男から借りるしかなかったの。わたしが手形を執行官の手から取り戻したのよ、苦労したんだから……こういうかわいそうな人たちが悪いことなんてするもんですか。わたしはまるで自分の息子や娘みたいにこういう人たちを家に受け入れるのよ。」

「誰かお金貸してくれる人をご存じ？」ルネは投げやりな調子で言った。

「十人ばかりね……あなたも人が良すぎるわ。女同士じゃない？ いっぱいいろんなことが語り合えるはずよ。あなたの旦那のことだけで、わたしの兄だからって容赦しないわよ。こんなにかわいい奥さんが暖炉の脇で待ちくたびれてるっていうのに、あばずれ女を追っかけ回して……あのロール・ドリニーに目玉の飛び出るほど遣つかってるのよ。あなたにお金を融通してくれないのもうなすけるわ。断わられたんでしょ？ ……もう、いやな奴！」

ルネはうっとりとして、柔らかい声に聞き入っていた。この声は、まるで彼女自身の思いのままだはつきりしないこだまのように、暗闇から出てくるの

だった。まぶたをなかば閉じて、肘掛け椅子に殆ど寝そべって、シドニー夫人がいることすら忘れ、悪しき思いが自分のもとにやってきて甘く誘いかける夢をみているような気がしていた。このブローカー女は長々としゃべった、生温かい水が単調に流れるように。

「ドウ・ロヴランスさんがあなたの生活をだめにしたんだわ。わたしをちっとも信じようとしなかったでしょ。ああ！わたしを信用してくれてたら、暖炉の脇で泣くこともなかったのに……どれほどわたしがあなたのためを思っているか。あなただってきれいな足をしてるわね。馬鹿だと思うでしょうけど、わたしがどんなにあなたに夢中か聞いてほしいわ。三日間会わないだけで、どうしても、ためつすがめつあなたの姿をながめに来ずにいられないの。そう、何だかさびしくなるの。堪能したいのよ、あなたのきれいな髪、こんなに白くてこんなにかわいい顔、ほっそりした体を……ほんとよ、これほどの体って見たことないわ。」

ルネは聞いているうちにつこりした。これまでつきあつた男たちだって、彼女の美しさをこんなに熱っぽく、こんなに心の底から恍惚と語りはしなかった。シドニー夫人はこの微笑みを見た。

「さて、話は決まったわ……」、彼女はさっさと立ち上がりながら言った、「おしゃべりばかりして、あなたがうんざりしてるのを忘れてしまひそう……明日来てくれるわね？ お金の話をしましょう、そして貸してくれる人を探しましょう……わかってね、あなたに幸せになつてもらいたい」。

ルネはじつとしたまま、暑さでぼうっとなり、しばらく黙つたあとでようやく答えた。まわりで語られていることを理解するのにたいへんな労力が必要だったかのようだ。

「ええ、何うわ、わかりました、お話ししましょ。でも、明日でなくても……ウォルムズは、内金で納得するでしょう。また何かうるさく言ってきたら、考えるわ……もうこの話はやめて。お金のごたごたで頭が割れそう。」

シドニー夫人はかなりむっとしたようだった。もう一度座って、撫でまわすようなひとりごとをまた始めんばかりだったが、ルネのけだるそうな様子をみて、攻撃を後日に延ばすことにした。ポケットからひとつかみの紙切れを取り出すと、その中を探して薔薇色の箱に入ったものを取り出した。

「あなたに新しい石鹸をおすすめしようと思つて来たのだったわ」と、商人のしゃべり方に戻つて言った、「わたしね、この石鹸を作った人に……執心なの。素敵な若い男性よ。すごくやさしい石鹸で、お肌にとつてもいいの。試してみても、お友だちにも宣伝して……暖炉の上に置いておきますよ。」

シドニー夫人は扉のところまで来ていたが、また戻つてきて、暖炉の投げかける薔薇色の光の中にすくと立ち、蠟のような顔をして、伸縮ベルトの宣伝をはじめた。いずれコルセットにとって替る発明品とのことだ。

「すぐくむつちりしたスタイルになれるのは請け合いよ、ほんとに蜂みたいにくびれた体にね……これは倒産品の中から拾い出したのよ。今度うちに来たとき、よかつたら見本を試着してみても……一週間ずつと、代訴士まわりで大忙し。ポケットに書類があるから、この足で、執行官のところに行つて、この発明の売り立てに最終的に異議申し立てしてくるわ……じゃあ、またね。待つてるわよ、あなたの涙を乾かしてあげたいの、わかつてね。」

彼女はするりと消え去つた。扉の閉まる音さえ、ルネには聞こえなかつた。消えかけた火の前に居つづけ、昼間の夢の続きをみた。頭の中には数字が踊り、彼方から、サカールとシドニー夫人の話し声、競売吏が家具調度を競りにかけるような調子で大金を彼女の前でちらつかせる声が聞こえてきた。首筋には夫の荒っぽい接吻が感じられ、振り向くと、足元には、黒い服を着てしまりのない顔をしたシドニー夫人が、耐えに耐えた恋人のように、熱っぽく話しかけ、きれいだと言われ、褒めちぎられ、逢引をせがむのであつた。これには笑つてしまつた。部屋の暑さはますます息詰まるものになつてきていた。奇妙な夢の数々に彩られた麻痺状態は、浅い眠り、かりそめの眠りにほかならず、その底には、カフェ・リッシュの小部屋、彼女が膝をついて倒れこんだ広いソファがいつも見えていた。もう、ちつとも苦しくなかつた。目をあけると、薔薇色の燠火のなかをマクシムが通つてゆくのが見えた。

翌日、政府主催の舞踏会で、「美しきサカール夫人」はすばらしかつた。ウォルムズは五万フランの手付け金を了承し、彼女は件の金の悩みから逃れつつあり、快方に向かう病人のようにこやかだつた。たつぷりとした白いレースが縁どる薔薇色の絹の夜会服をまとつた彼女が、ルイ十四世風の長い裳裾を引きずつて、部屋から部屋へと歩くと、囁きがもれ、男たちは一目見ようと押し合つた。内輪の人々は、暗黙の了解にこっそり微笑みながら頭を下げ、パリの政界に知れわたつた帝政の確たる柱である美しい肩に、敬意を表した。彼女は他人の目を完全に無視して胸もとを大きく剝り、裸同然でいながらあまりに平然とたおやかに歩いたので、慎みに欠けるという印象など、もうほとんどなかつた。政界の大立者であるユージェーヌ・ルーゴンは、疑い深い人々に帝政の良さを味わわせ説得するには、自分が議会で演説するよりもこの裸の胸の方がより一層雄弁で、より好感を与え、より説得力があることを百も承知であつた。彼は義妹のところへ行き、いつもよりさらに指二本分胸を大きくあけたその素敵な大胆さをたたえた。立法議会のほぼ全員が来ており、議員たちがこの女を見る目つきからすると、大臣ルーゴンは、翌日審議されるパリ市の負債についての厄介な問題も、きつとうまく切り抜けられると思つた。このルネのような花、絹の肌をし、彫像のごとき裸身のかくも不可思議な逸楽の花、背後に悦びの生温かい残り香の漂う悦楽の化身を巨万の富という土壌に育てる権力、こんな権力に楯突くことはできまい。だが、舞踏会の出席者みなが囁いたのは、ダイヤモンドの髪飾りと首飾りであつた。男たちはこれに見覚えがあつた。女たちはさりげなく目配せしあつた。夜会の間こればかりが話題となつた。シャンデリアの白い光の下いくつものサロンが連なり、まるで星の群れが小さな一隅に落ちてきたかのように、きらめく雑踏に満たされた。

午前一時頃、サカールは姿を消した。彼は、大芝居を当てた男のように、妻の成功を楽しんだのであった。こうしてまたもや信用が固まった。ロール・ドリニーのところ用があつたので、舞踏会のあとルネを家まで送るようマクシムに頼んで出て行つた。

マクシムは夜会の間、おとなしくルイズ・ドウ・マルユの傍らにいて、行き来する女たちをこきおろすのに二人とも夢中になっていた。とびきり気の効いた悪口を思いつくと、二人はハンカチで笑いを押し殺した。帰るには、ルネの方から、マクシムに付き添ってくれるよう頼みに来なければならなかつた。馬車の中では、彼女はヒステリックに陽気だつた。つい今し方通りぬけてきた光と香水とざわめきに酔つて、まだ神経が昂つていた。カフェ・リッシュでしでかした、マクシムいわく「どじ」はもう忘れてしまったようだつた。ただ、

「ずいぶん面白そうね、あの僇僕せむしのルイズは」

と訊ねた声はうわずつていた。

「ああ、面白いの何のつて……」とマクシムはまた笑い出しながら答えた、「ドウ・ステルニック候爵夫人見たでしょ、頭に黄色い鳥をのつけた……ルイズつたら、あれは機械仕掛けで、あわれな候爵さまにむかつて一時間ごとに、羽をばたつかせてクークー！ クークー！ って鳴くんだつて言うんだよ。」

学生がふざけあうようなこの冗談がルネにはとても可笑しかつた。家に着いて、マクシムがさよならを言おうとすると、ルネはひきとめた。

「上がつていらない？ セレストが軽い食事を作ってくれてると思うんだけど。」

彼は上がった、例によつて言われるがままに。軽食の用意などできておらず、セレストはもう休んでいた。ルネは三本枝の小さな燭台のろうそくを点さねばならなかつた。手がすこしふるえている。

「あの馬鹿」、彼女は小間使いのことをのしつた、「わたしの言いつけがわかつてなかつたのね……とてもじゃないけどひとりでは着替えられないのに。」

彼女は化粧室へと移り、マクシムはルイズの言ったことをまたひとつ思い出し、それを話そうと後についていった。男友達のところにも長居するようにくつろいで、ハヴァナ葉巻を吸おうと、煙草入れを探していた。しかし、燭台を置くやいなや、彼女は振り向いて男の腕のなかに倒れかかり、何も言わず鬼気せまる面持ちで唇を重ねてきた。

邸宅内のルネの居住空間は、絹とレースにうずもれ、色っぽくも粋な贅を尽くした逸品であつた。寝室の手前にごく小さな閨房があり、この二部屋はほとんど一体をなしている。閨房は寝室への入口、大きなアルコーヴであり、ゆつたりした椅子がいくつか置いてある。二間を隔てるちゃんとした扉はなく、二重のカーテン扉で仕切つてある。いずれの部屋も壁には、薔薇や白いリラやきんぼうげの大きな花束を刺繍した明るい灰色の艶消し絹が張られている。カーテン類は、灰色と薔薇色の段だら絹地の上にヴェニスヴェニスのギピュール・レースを重ねたものだ。寝室には、宝飾品と言

べき白大理石の暖炉があつて、壁布と揃えて、薔薇や白いリラやきんぼうげの大きな花束をかたどつたラピスラズリなどの貴石のモザイクが一面に象嵌され、まるで花籠のようだ。灰色と薔薇色の広いベッドは、布で被われふつくら詰めものされて木肌はまったく見え、枕もとは壁いっぱいまできており、襷飾りやギビュール・レースや花束刺繍の絹が天井から絨緞まで垂れて、部屋のたつぷり半分を占領している。まるで、この部屋そのものが、おしゃれな装いをした女のごとく、まるみを帯びた姿にくつきりと浮び上がり、リボンやフリルやスカートやスカートを膨らませる腰当てをつけているようだ。たつぷりしたカーテンは、スカートのようにふくらんで、誰か大きな恋する女が身を屈め、恍惚として枕もとに倒れこもうとしているかにみえる。カーテンの下は、さながら聖堂で、細かいプリーツのバテイスト布が雪が積もつたように重なり、繊細で透き通るように薄手のありとあらゆるものが、おごそかな薄闇のなかにほんやりとみえている。ベッドは、敬虔なまでに立派な建物のようで、何かの式典のために飾り付けられた礼拝堂を思わせ、ほかの家具はその蔭で目立たないが、低い腰掛けがいくつか、二メートルもある姿見、引き出しの無数に付いた箆笥がある。床の絨緞は、青みがかった灰色で、薄紅色の薔薇の花びらが散っている。そしてベッドの両脇には、薔薇色のビロードの飾りがついた、銀の爪をした黒い大きな熊の毛皮が一枚ずつ敷かれ、熊は首を窓のほうへ向けて、ガラスの目で虚空を見つめている。

寝室ではすべてが柔らかに調和し、抑制が効いていた。灰色と薔薇色の夢見るような旋律のなかには、金属の放つ光や派手な金めつきなどのけたたましい音は何ひとつとして聞こえない。暖炉を飾る調度品もまた、鏡の縁といい、置き時計といい、小ぶりの燭台といい、すべて古いセーヴル磁器製で、金をかぶせた銅製の枠がかるうじて目につくだけだ。この品々、特に置き時計は逸品で、ふつくらした顔の愛の妖精たちが輪舞し、降りてきて、文字盤を覗き込んでいる。この素裸の子供たちは時のあわただしい歩みをからかっているようだ。この目立たぬ贅沢、ルネの好みでやさしく微笑むような感じに仕上げられた色彩と物たちが、黄昏のような、カーテンの閉まった閨房に洩れてくるような、淡い光をはなっている。ベッドがどこまでも続いているようだ。絨緞も、熊の毛皮も、ふつくら詰めものした椅子も、床の柔らかみを壁伝いに天井まで続けるキルティングした壁布も、部屋そのものがひとつの大きなベッドのようである。そして、ベッドのなかと同じく、あらゆるものにルネは自分のからだの痕跡、温かみ、香りを残していた。寝室の手前にある閨房の二重のカーテン扉を開くと、絹の刺し子した掛け蒲団を持ち上げて、まだ温かくしっとりした広い褥のなかに入り込むような気がする。そこには、上質の布を幾重にもかさねた上に、三十路のパリ女の見事な肉体の線、眠りと夢のこつていた。

隣は広々とした衣装部屋で、古いインド更紗を張った壁に沿って丈の高い紫檀の箆笥がずらりと並び、そこにはドレスが無数に掛かっていた。セレストは整理好きで、ドレスを古い順に並べ、分類し、女主人の気紛れのなかに論理的感觉を持ち込み、この部屋を聖具室のように静かに、厩舎のように清潔に保っていた。ほかに家具はひとつもなく、布きれひとつ落ちていない。箆笥は、ニス塗りの馬車のように、一点の曇りもなく冷たい光を放っている。

だが、ルネの住居の傑作、パリ中の噂的的は、化粧室である。「ヴェルサイユの鏡の間」というような調子で、「美しきサカル夫人の化粧室」と

呼ばれていた。この化粧室は、邸宅の小塔のひとつのなかにあり、きんぼうげ色の小サロンの真上に位置していた。ここに入ると、大きな丸い天蓋、恋する女戦士が夢のなかで立てた魔法の天蓋のなかにいるかのようだ。天蓋の布は、彫りを施した銀の冠で天井の真ん中に支えられ、弧を描きながら壁に達し、あとはまっすぐ下に降りて床に届いている。これは豪華な布で、ところどころ大きく襷をとった極薄のモスリンが薔薇色の絹の上に重ねてある。ギピュール・レースが縫付けられて襷を仕切り、縄編み模様様の銀のテープ飾りが、天井の冠から壁布に沿って、レースそれぞれを挟む形でついている。寝室は薔薇色がかかった灰色が基調であるが、ここではもっと明るく、薔薇色を帯びた白、裸の肉体の色である。そして、レースでできた半円筒ヴォールトのように垂れこめた天幕から覗ける天井といえ、冠部分の小さな空洞ごしの青みがかった穴だけで、そこには、笑いながら眺めて矢を射ようとしている愛の妖精が、流行画家シャプランの筆で描かれている。この下にいると、ボンボン容れの底にでもいるような、輝くダイヤモンドのためではなく、女の裸体をしまうために作られた大きな宝石箱の中にもいるような気がする。絨緞は雪のように白くひろがり、一輪の花も散っていない。鏡つき衣装箆筒は、二枚のパネルに銀の象嵌がほどこされ、長い椅子が一脚、クッション・スツールが二脚、白サテンのスーツがいくつか、そして薔薇色大理石を張った広い化粧台があり、これらの家具の脚はモスリンとギピュール・レースの家具用裾飾りに隠れている。広い化粧台には、薔薇色と白の縞模様に入った古いボヘミアングラスの瓶や器、洗面たらいが並んでいる。さらにもうひとつテーブルがあり、鏡つき衣装箆筒と同じく銀で象嵌され、化粧道具の数々、何に使うものやら奇妙な小さな道具たちが、上にきちんと並べてある。孫の手、爪磨き、色々な大きさと形のやすり、まっすぐな鋏、曲がった鋏、いくつもの種類のピンセットと留め針など、どれも銀と象牙でできていて、ルネの頭文字が刻まれている。

だが、化粧室には、えも言われぬ魅惑の一角があり、これこそがこの部屋を有名にしていた。窓と向かいあったところの天蓋が開いて、長いが奥深くはないアルコーヴのような壁のくぼみに薔薇色大理石の水盤、つまり浴槽がみえていた。床に填め込まれ、貝殻のようにぎざぎざした溝のある縁は絨緞とすれすれの高さである。この浴槽には大理石の階段を降りて入る。白鳥の首をかたどった蛇口の上には、鏡があつて、壁のくぼみの奥を占めている。この鏡は、切り取られただけの縁なしのヴェネツィアングラスで、艶消し模様が彫られている。毎朝、ルネは短い湯浴みをした。この浴槽のせいで、化粧室には一日中、湿り気がこもり、洗いたての濡れた体の匂いが漂っていた。蓋をとった香水瓶やケースの外に出た石鹸から、時折つんとくる香りが漂って、いささか物憂いだらけた空気に刺激を効かせていた。ルネは昼頃まで殆ど裸でここにいるのが好きだった。まるい天蓋もまた裸であった。薔薇色の浴槽、薔薇色のテーブルと器類、下に薔薇色の血が流れているように見える天井と壁のモスリン、これらは肉体のまるみ、肩や乳房のまるみを帯び、一日のうちの時間によって、少女の雪の肌になったり、成熟した女の熱い肌になったりした。部屋全体が大きな裸体であった。ルネが浴槽からあがると、その輝く体は部屋の薔薇色の肉にもう少しだけ薔薇色を加えるにすぎなかった。

マクシムがルネの服を脱がせた。彼はこういふことは心得たもので、手はたちまち留めピンのありかを突き止め、生まれながらにしてこつを心得

ているかのように、女のからだに沿ってあちこち動いた。彼女の髪もほだき、ダイヤモンドの飾りはずし、就寝用に結び直した。小間使いや髪結いの代りをつとめながら彼が冗談を言ったり愛撫したりするので、ルネは、ねっとり押し殺したように笑い、そのあいだに胴着の絹地がきしみ、スカートが一枚、また一枚とほどかれていった。身もあらわになると、燭台のろうそくを吹き消し、彼女はマクシムを抱きしめて寝室の方へと連れていった。あの舞踏会は彼女を酔わせてしまった。熱に浮かされた頭には、暖炉のそばで過ごした前日の昼間、ひどい茫然自失のうちに過ごしたあの昼間、とらえどころのない微笑みかけるような夢の数々が浮かんでいた。サカールやシドニー夫人が乾いた声でしゃべり、執行官のような鼻にかかった声をはり上げて数字を口にするのが、まだ聞こえていた。この二人こそが彼女を打ちのめし、罪へと駆り立てるのだ。そして、薄暗い大きなベッドの奥でマクシムの唇を求めている今この時ですら、目に浮かぶのは、きのうの暖炉の火のなかから彼女を見つめる彼、その目で彼女を燃え立たせる彼であった。

マクシムは、朝の六時になってようやく帰った。ルネから、モンソー公園の小さな扉の鍵を渡され、毎晩来ると約束させられた。化粧室は壁のなかに隠れた階段できんぼうげ色の小サロンとつながり、この階段は小塔のなかの部屋すべてに通じていた。小サロンから温室を通って簡単に公園に出られた。

明け方、濃い霧のなかを帰りながらマクシムは、うまいことをしたものと気を良くしてぼうっとなっていた。だが、もめごとを起こすのがいやなばかりに受け入れたのではあった。「しょうがない！ 何てだったって、やりたがってるのはルネなんだし……いい女だよなあ、自分で言ってたとおりであったよ、ベッドではシルヴィアの倍くらいすごいって」と思いながら。

中学校の擦り切れた制服を着たマクシムがルネの首に抱きついて、そのフランス衛兵風の衣装をしわくちやにしたときから、二人は道ならぬ関係におちいりつつあったのだ。以来、二人の間には何かにつけて倒錯的なものが絶えなかった。女は子供におかしな教育を施し、馴れ馴れしい振る舞いをしていくうちに二人は友達になり、後には明るく大胆に打ち明け話をしあつた。こうしてあぶなっかしくつつきあっていたあげく、二人は奇妙な絆で結ばれることとなり、友達つきあいの楽しさは肉体的な満足と殆ど変わらぬものとなってきた。何年も前から互いに身を任せあつていたので。性行為そのものは、気づかずにきた病が起こした発作にすぎなかった。二人の生きている狂気じみた世界で、この過ちはあやしげな液をしたたらせるこつてりした肥の上で芽生え、放蕩には格好の条件に恵まれて、奇妙に洗練されながら成長してきたのである。

大きなカレーシユ馬車でブローニーの森へ起き、ゆるゆる走りながら耳もとで猥談をささやきあつたり、子供の頃に知らず知らず本能的にしてかした性的な悪戯の思い出話をしたり、二人の欲望は道草をくいながらも、いつの間にか満たされていたのだ。こんなとき、まるでそつと愛撫しあつたかのように、二人は何となく気がとがめた。そしてあの、「原罪」ともいうべき卑猥な会話の醸し出すけだるさは、二人を官能的な疲れで酔わせ、そのものずばりの接吻よりもなお一層心地良く二人をくすぐつた。こうして、二人の友達関係は、恋人たちのゆつくりとした歩みとなり、いつ

の日かカフェ・リッシュの小部屋へ、ルネの灰色と蔷薇色の大きなベッドへと行き着くのは避けられなかった。抱き合ったとき、罪を犯したという衝撃はなかった。まるで長年の愛人のようで、口づけには遠い昔の思い出が混ざっていた。いつもぴったりと一緒にいながらこれまでずっと何もなしで来たので、意識せぬまま交しあった甘い言葉や愛撫に満ちた過去をついつい口に出してしまうのであった。

「覚えてるかな、僕がパリに着いた日、君は変わった服着てたね」、マクシムは言った、「で、僕は指で君の胸に角を描いて、V字型に胸を開けたほうがいいよって言ったんだ……ブラウスの下に肌を感じられて、僕の指がちよっと奥まではいりこんで……素敵だったよ、とても……」

ルネは笑って、彼にキスして、つぶやいた。

「もうすっかり悪い子だったわね……ウォルムズの店ではあなただって面白かったわ、覚えてるでしょ！ わたしたち、あなたのことを『小さな殿方』と呼んでいたわ。わたし、いつも思ってたんだけど、おでぶのシュザンヌだったら、アドウリーヌがこわい目で見張ってなかったら、あなたの好きないようにされ放題だったわよ。」

「ああ、よく笑ったよね……」マクシムはささやくように言った、「写真のアルバムとか、ね？ それからほかにもいろんなこと、パリ中一緒にあちこち行ったり、グラン・ブルヴァールのお菓子屋でおやつ食べたり。あの苺の小さなケーキ、君は好きだったでしょ？ ……それに、あの午後は忘れられないなあ、ほら、アドウリーヌが修道院でやらかしたすごいことを君が話してくれたときだよ。シュザンヌに手紙書いて、アルチュール・デスパネって男の名でサインして、修道院からさらってゆくって言ったとか……」

恋人たちは、この艶聞になるといっそう浮かれ騒いだ。それから、マクシムは甘えた声で続けた。

「学校へ馬車で迎えに来てくれたとき、二人ともおかしかっただろうね……君のスカートの中にすっぽり隠れて、それほど僕はまだ小さかったんだ。」

「そうね、そうね、ぞくつとして、彼女は男を引き寄せ、ことばがもつれた、「おもしろかったわね、ほんとに……わたしたち、知らず知らずお互いのこと好きだったのよ。わたしは、あなたを前にしてそれがわかったわ。この前、ブローニーユの森の帰り、あなたの脚に触れてどきどきしたの……でもあなたは何にも気がつかなかった。ねえ、わたしのこと、思ってたかったの？」

「いや、思ってたよ」、彼はすこしどきまぎして言った、「ただ、どうしようもなく、わかるだろう……思いきったことができなかったんだ。」

これは嘘であった。ルネを自分のものにしたいたとは、一度としてはっきり思ったことがなかった。本当に彼女が欲しかったのではなく、放蕩のついでにちよつと触れてみたにすぎなかった。無気力な彼は、何かが欲しくて努力をするということはなかった。ルネを受け入れたのは、彼女の方から積極的に迫ったからであり、彼女のベッドにまではいったのも、そうしたからではなく、そうなるだろうと思っていたわけでもなかった。しかし、いったんベッドに転がり込むと、そこに居つづけた。暖かいし、それに彼はどんな穴ぐらでも、はいりこんでしまえば、その奥でくつろげ

たからだ。はじめのうちは、得意な気さえした。人妻をものにするのは初めてだったから。その夫が自分の父親だということは考えになかった。

だが、ルネはこの過ちのなかに、心の籠かごがはずれたがゆえの激しい情念のすべてをもちこんでいた。彼女もまた坂道を転げ落ちていたのだ。ただ、力ない肉体が重力のままになるように落ちるところまで落ちてしまったのではなかった。彼女のうちで欲望の目覚めたときには、それにあらがうには時すでに遅く、転落はもう避けられなくなっていたのだ。この転落は突如として彼女をおそった。まるで、倦怠が必然的にもたらずもののように、そして、倦み疲れた感覚、傷ついた心を唯一刺激することのできる稀にみる激しい快楽のように。あの秋の日の散策、黄昏時、ブローニーの森が眠りに就こうとしていたときだった、息子との仲をほんやりと意識したのは。何かが肌に触れて、ついぞ知らぬおのきが走るように。そして、その日の夜、夕食のほろ酔い気分のうちに、嫉妬にあおられて、その思いははつきりした形をとり、彼女の前に眩くらく立ちはだかつたのだ、温室の炎のような熱さの只中、マクシムとルイーズを前にして。この時、彼女は悪を欲した、誰も犯さぬような悪、からつばの生活を満たしてくれ、彼女を地獄に落とすあの悪を。少女時代と同じく彼女は今もこの地獄が怖かつたのだが。しかし、翌日になると、奇妙にも、悔やむような飽きてしまったような気になって、もう欲しくなくなった。すでもう罪を犯してしまったかのように、期待したほど楽しくもなく、また、あまりにも汚らしいもののようにも思われた。彼女とマクシムは、ある夜、うつかり、握手でもしているつもりでつるみあうべく運命づけられていたのだ。この二人の仲のあずかり知らぬところで、重大局面は避けられぬものとなり、ひとりでやってきたのにちがいがなかった。しかし、愚かしい過ちの後、彼女は名づけようのない楽しみをまた夢に描きはじめた。そしてそのとき、マクシムを再び抱いて、彼を知りたい、自分が罪と看做みなしている性愛の痛いまでの快楽を知りたいと思つた。彼女はみずからすすんで息子との関係を受け入れ、強く求めさえし、味わい尽くそうとした、後悔するならしてもよいという覚悟で。彼女は活動的に、自覚的になった。上流夫人らしい、物怖じせぬ情熱、ブルジョア女の臆病な先入観、自己嫌悪にひたっている女の抱く葛藤、喜び、嫌悪、こういつたすべてをもって、彼女は愛した。

マクシムは毎晩のように通ってきた。庭伝いに一時頃に来る彼を、ルネはよく温室で待った。小サロンに入るには、ここを横切るからだ。だが二人は、まったく臆面もなく、殆ど隠れもせず、不倫関係ではごくあたりまえの用心すらしなかった。たしかに、邸宅のこの一角は二人の領分で、入ってきてよいのはサカールの従僕のバティストだけであった。彼は重々しい感じの男で、仕事がすむとさつさと姿を消した。マクシムは笑いながら、部屋で回想録でも書くんだらうと茶化した。そんなある夜、マクシムが来るとすぐ、ルネは、ろうそくを手に勿体ぶつてサロンを通るバティストを、指し示した。背の高い従僕は、大臣のようにいかめしく、その夜、ろうそくの黄色い光に照らされた顔は、普段にもまして真面目くさって厳しかった。恋人たちが身を屈めると、彼がろうそくを吹き消して厩舎のほうへ向かうのが見えた。そこに眠っているのは、馬と御者たちだ。

「見回りしてるんだ」とマクシム。

ルネのおびえはおさまらなかつた。普段からバティストが気になっていたのだ。その冷淡さ、女のあらわな肩など見向きもしない澄んだ目からし

て、この屋敷で唯一まともな人間ではないかしら、とまで言った。

それで二人は少しは用心して逢うようになった。小サロンの扉を開けると、このサロン、温室、そしてルネの寝室や化粧室で、安心してくつろげた。これはひとつの世界をなしていた。最初の数カ月、二人はここで、この上なく洗練された、凝りに凝った悦びを満喫した。寝室の灰色と薔薇色のベッドにはとどまらず、化粧室の薔薇色と白の裸身につつまこまれるようにして、小サロンのくすんだ黄色が短調のシンフォニーを奏でるなかで、二人は愛しあつた。部屋のそれぞれに特有の匂いがあり、カーテン類も異なり、独自の生が息づき、どこにいるかによつて二人の情愛は異なり、ルネは様々な趣の恋する女になつた。生温かい貴族的な寝室では、キルティングした貴婦人の褥で上品に綺麗、ここで愛しあうときは趣味よく控えめに。化粧室の肉色の天蓋のもとでは、浴槽の芳香とじっとり湿つたけだるい空気のなか、ルネはわがままで官能的な女の風情で、湯浴みから上がるなり、身をまかせた。マクシムはここでの彼女がいちばん好きだつた。それから下の階では、小サロンの明るい日の出に黄金色の曙光をあげて、髪は金色に輝き、彼女は女神となつた。プロンドのダイアナの面持ちで、裸の腕は清らかなポーズをとり、彼女の端正な肉体は二人掛けソファの上で、古代風の気品ある高貴な線を描いていた。しかし、マクシムがほとんど恐れに近い気持ちを抱いている場所があつた。ルネが彼をそこへ引き込むのは調子の悪い日、尋常ではない陶醉を求めている日だけだつた。そういうとき、二人は温室の中で愛しあつた。そこで許されぬ仲の逸楽を味わつた。ある夜、狂おしく心悶えるひととき、ルネは恋人に、熊の毛皮を一枚取つてきて頼んだ。それから二人は、池の端、大きく弧を描く通路で墨色の毛皮の上に横たわつた。外は凍たつき、澄みきつた月夜である。マクシムは、ふるえながら、手も耳もかじかんでやつてきたのであつた。温室の暖房が効いているので、彼は獣の皮の上で気が遠くなつた。刺すように乾いた寒さから出た途端に重苦しい炎のなかに入つたので、鞭で打たれたようにひりひりと熱さを感じる。我に返ると、ルネがひざまづき、かがみこんで、目を凝らしている。荒々しい態度がおそろしい。髪はばざりと垂れ肩ははだけて、拳で身を支え、背を伸ばして、目が燐光を放つ大きな雌猫のようであつた。マクシムは仰向けになり、彼を見つめる盛りをついたこの美しい獣の肩越しに、大理石のスフィンクスがあつて、月明りがその腿を照らしているのに気づいた。ルネは、女の顔をしたこの怪物と同じ姿勢で同じ笑みを浮かべ、ベチコートはほどけて、この黒い神の白い姉妹のようだつた。

マクシムはぐったりしたままであつた。息詰まるように暑い。空から火の雨となつて降り注ぐ暑さではない。地を這いずり回るただならぬ臭気のごとく、陰にこもつた暑さである。その湯気は立ち昇つて嵐をはらんだ雲となる。じとじとした熱気に、恋人たちはぐつしよりと玉の汗をかいた。炎を浴びながら、二人は長い間、動かず何も語らずにいた。マクシムは憔悴して生気なく、ルネは、ふるえながら、やわらかく敏捷なひかがみのような手首で身を支えていた。温室の小さく区切られたガラス壁ごしに、外のモンソー公園が垣間見えた。細くくつきりした輪郭の黒い木々、凍つた湖と見まがう白い芝生など、この死んだように静まりかえつた風景の細やかさ、はつきりした単一の色調は、日本の版画に描かれた景色を思わせる。そして恋人たちが横たわる小さな焼けつく地面、燃える褥は、静まりかえつた冷たい広がり、真只中で、奇妙にもそこだけ熱く滾つていた。

二人は、狂おしい愛の一夜を過ごした。ルネは男、激しく行動的な意志そのもの、片やマクシムは受け身であった。この中性的な、子供の頃から男らしさを欠いた金髪の小綺麗な人間は、好奇心に駆られた女に抱かれて、古代ローマの若者のように毛のない手足や美しくほっそりとした体ゆえに、まるで大柄な女の子であった。彼は、性的倒錯のために生まれ育ってきたかのようなようだった。ルネは支配するのを楽しみ、男とも女ともつかぬこの人間を自分の情熱のおもむくままにあやつった。彼女は、自分の欲望に絶えず驚き、思いもよらぬ官能の喜びを見出し、不快と激しい快樂の入り混じった奇妙な感覚を味わった。もう、わからなくなった。彼女は、これでいいのだろうかと思いつつも、ふたたび彼の柔らかい肌、ぼつたりした首筋にとらわれ、彼はまた身をまかせ、また気を失わんばかりになった。彼女はこうして至福のひとときを味わった。マクシムは、新たな悦びのふるえを彼女に教えて、そのざらにはないお洒落、桁はずれの贅沢、常軌を逸した生活の総仕上げをした。彼女のまわりですでに鳴り響いていた異様な調べを、彼が彼女の肉の内側に押し込んだのである。彼は当世の流行と狂気の数々にびつたりした恋人であった。なよなよした体の線が上着越しにもわかるこのきれいな若い男、髪を真ん中で分け、退屈そうなら笑い浮かべて盛り場をうろつく女のできそこないは、ルネにとつては、腐敗した民のあいだで時として肉体を疲弊させ頭を狂わせる、あの退廃した放蕩のひとつとなつたのである。

ルネが男役をするのはとりわけ温室であつた。二人はここで、一夜のみならず、幾度も熱い夜を過ごすことになつた。彼らとともに、温室全体が愛し合い燃え上がった。重苦しい空気のなか、白っぽい月明りのもとで、二人は自分たちを取り囲む奇妙な植物たちが入り乱れて動き、抱擁を交すのを見た。熊の毛皮は小道の幅いっぱい広がつていた。足元では池が湯気をたて、根が池いっぱいにごめき密に絡みあつて一方で、水面では薔薇色の星のような睡蓮の花が、乙女の胸元のように開きつゝあつた。そしてトルネリアの茂みは、氣を失つた海の精ネーレイスの髪のように垂れ下がつていた。二人のまわりでは、椰子やインド竹が丈高く伸び、温室の中央に向かい、そこで首をかたげて葉が絡みあい、ぐつたりした恋人たちがよるめいているようである。下の方では、フジエール、プテリッド、アルソフィラなどのシダ類が、幾重にも規則正しく装飾のついた幅広のスカート姿、緑色の装いの貴婦人さながら、道のほとりで、物言わずじつと恋人の訪れを待っている。その横では、ペゴニアの赤い斑のついた捻れた葉やカラデイウムの槍の穂のような白い葉は、痣のある肌や青白い肌が見え、恋人たちにはこれをどういつてよいのかわからなかつたが、時として、血の出るような激しい愛撫のさなかに地面に転がる、まるみを帯びた腰や膝のように見えた。バナナは、たわわに捻つた果実にたわみ、二人に地の肥沃を語り聞かせた。一方、アビシニアのユフォルブは、醜い瘤と刺だらけの歪んだろうそくのような姿が、暗がりによつすら見えたが、樹液、この熱く溢れる命の流れが滲み出しているようである。二人のまなざしは、温室の奥まったほうへ向かうにつれ、葉や茎がますます奔放に乱れ絡みあつて闇を満たしているのをとらえた。段の上には、ピロードのように柔らかいマランタや紫の吊鐘のような花をつけたグロキシニア、漆塗りの古い剣に似たドラセナがあるのだが、もう二人にはそれと見分けられない。情愛を求めて満たされぬ、生命にあふれる草々の輪舞であつた。葛がトンネルのように覆っている四隅では、植物たちはいつそう狂おしく性の悦びを夢み、ヴァニラ、コック・デュ・ルヴァン、クイ

スクワルス、ボイニアのしなやかな枝が、姿の見えぬ恋人たちの腕が絡みあっているように、あちこちに散らばっている快樂をすべて引き寄せるかに、やみくもにまわりのものを抱きしめようとしていた。果てしなく伸びるこれらの腕は、ぐったりと垂れ下がり、快感の絶頂の痙攣のときのように締めつけあい、互いに求めあい絡みあつて、盛りをついた群れのようだ。温室まるごと、熱帯の緑と花々が燃え立つように生い茂り咲き誇るこの処女林の一隅が、発情していた。

マクシムとルネは、感覚が狂つて、力に溢れた大地の婚姻のなかへと引きこまれるような気がした。熊の毛皮ごしに感じられる地面は二人の背中を熱くし、丈の高い椰子からは二人の上に熱い雫^{しずく}が滴つた。木々の幹に昇ってくる樹液は二人にも浸み込み、たちまちのうちに成長し、こぞつて繁殖しようという狂気じみた欲望を吹き込んだ。二人は発情する温室の一部となりつつあった。その時、青白い光のもつと、二人はいくつかの光景に茫然とした。それは、シダと椰子の交尾に長々と立ち会う悪夢であつた。葉叢^{はむち}のかたちは定かでないが、どういふふうにもとれそうであつたから、欲望に駆られた二人の目には、男女が睦みあう姿に見えた。つぶやき、囁きが、繁みから聞こえてきた。絶え入りそうな声、恍惚のため息、痛みをうったえる押し殺した叫び、彼方の笑い声、マクシムとルネ自身が唇を重ねあいながら発し、こだまとして帰ってくる音のすべてが。時折、地面が揺れているように感じた。まるで、大地そのものが、絶頂に達して、快感に堪えかねてすすり泣くが如く。

たとえ目をつむつていても、息詰まるように暑く薄暗いために全感覚が狂つていなくても、匂いだけでも、二人の神経は常ならぬ興奮にとらわれたであろう。池からは、鼻をつく濃厚な匂いが立ち昇つて二人をじつとりと包んだが、そこには花や草木のありとあらゆる香りが入り混じつていた。時折、ヴァニラが、森鳩がクークー鳴くような香りの旋律を奏で、スタンオペアからはもつと激しい旋律が聞こえてきた。この虎斑のある口は、治りきつていない病人の喉から出るきつい匂いの息を吐き出していた。蘭は、鎖で吊された籠のなかで、生きた香炉のように、そよそよと香りを放っていた。しかし最も強い、ほかの漠としたそよぎすべてが溶け込んでいような匂いは、人間の匂い、性愛の匂いである。マクシムはルネの首筋に口づけし、彼女のほどけた髪に顔を埋めたとき、それとわかつた。二人はこの発情した女の匂いに酔い続けた、大地の分娩する寢床に漂うごとく温室のなかに漂う匂いに。

恋人たちは普段、マダガスカルのレストランの下に横たわつた。ルネがかつて葉を噛んだ、毒のある木だ。二人をとりまく白い彫像は、緑の植物たちがいつせいに交接するのを見て笑っている。月はめぐつて、照らし出すものを変え、移ろう光でドラマに生命を吹き込んだ。パリからはるか遠くに来ていた。ブローニーニユの森や夜会などの社交界に出入りする安易な生活から離れて、インドの森の片隅にある、黒大理石のスイングスが守り神となつて何か魔境めいた寺院にいた。罪へ、呪われた愛へ、狂暴な獣どうしの睦みあいへと自分たちが転がりつつある、と二人は感じていた。二人を取り囲む^{おびた}夥しい植物群のすべて、池のなかのひそやかなうごめき、葉叢のむきだし^{むきだし}の淫らさが、彼らを情念のすさまじい地獄の只中に放りこんでいた。十二月の澄みきつた冷気の中に隠れた、夏の炎熱に滾っているこのガラスの籠の底で、二人はこのとき母と息子の道ならぬ恋を楽

しんだ。熱くなりすぎた大地から稔った罪ある果実のように、彼らのおそるべき褥が心の底では不安でありながら。

ルネの体は黒い毛皮に白く浮き上がっていた。うずくまった大きな猫のように、背骨を伸ばし、柔らかく敏捷なひかがみで身を支えるように拳をつばって。彼女は性の悦びではちきれんばかりである。小道の黄色い砂に黒い染みとなっている毛皮、その墨色の広がりの上に、肩と腰のすつきりした線が、猫の体のようにはっきりと浮き出ている。マクシム、この獲物は彼女の下で仰向けになって身をまかせ、彼女はこれを思いのままにしていた。時々突然身を屈めたと思うと、むさぼるように彼に接吻した。すると、彼女の口は、邸宅の側壁を覆う中国のハイビスカスの、満たされぬ血の滴るような輝きを放って開いた。彼女はもはや、温室の娘、情熱に燃える娘にほかならなかった。彼女の口づけは、花開き、そして萎れた。中国のハイビスカス、大葵の赤い花が数時間しかもたず、次々と新たに咲くように、巨大なメッサリーナの傷ついた満たされ得ぬ唇のように。